

# 同窓会誌



## 建築学科同窓会の歩み

建築学科同窓会々長 小高鎮夫(建34年卒)

昭和42年1月に発足した建築学科同窓会も満二年半を経過し、その間、名簿発刊・会誌発行・学生コンペ援助・学園同窓会設立（建築・機械・応用化学・電気の大学4学科・高校・専修学校と校友会一態度保留）、及設立総会をも含め、総会四回開催、そして毎月一回の運営委員会を開催した。総会、運営委員会の内容は別記本会記事に記載の通りである。

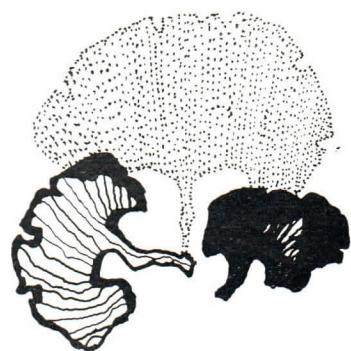
この一年間、各会員相互の交流の基になる又、建築学科同窓会の特色でもある運営委員会（各卒業年度別に2～3名選出）内の交流、及運営委員会の実にその動向を見て來たが、現状のあり方には総体的に過ぎた欠点があったので、今後は運営委員会の上に責任者会議を設計、そこで討議されたのを運営委員会にて決定し、施工する事とし、各々を隔月に行う事にした。（第一回責任者会議1月開催）又、新たに企画部を設け、会長、副会長を補佐し、各運営委員の分科会活動における企画作成に参加し、運営委員会のブレーンとしての役割を果たしてもらう事になった。人材は若い卒業生がその任に當る事が望ましく、合せてそれは組織の若さを作り出す事になると思われる。

現在建築学科の卒業生は卒業後10年迄の若い年代層によって構成されているものであって、社会において最も多忙な又最も仕事に打込まれねばならない大切な時代の人達である。この様な人達の集まって作られる運営委員会は兎角不活発になりやすい。又この様な組織は強制によって發展していくものでなく、あくまでも、委員一人一人の自發的意志の積重ねによってそれはなされるものであろう。この同窓会を今後数年は現在の様な型で少しづつ前進していくものと思われる。けれどあく迄、休む事なく、後退する事なく、あせらず、しかも着実に歩を進めて行くつもりである。

学園同窓会と校友会の関係については、学園同窓会の発足以来の学園同窓会加入への校友会の態度保留は、本年一月の両者の会合にて、最終的には合意であるとの話

合いがなされた。今後行こなわれる会合では、それがどの様な具体的な方法で行こなうかを討議するのであって、学園紛争が全国的に広がっている昨今、工学院大学の現在を直視し、将来をも合せ考えて、より広い視野に立って検討される事が必要であろう。特に校友会の母体である全国の支部は、本学卒業生にとって、最も深い関心を持つ問題であり、支部問題には他大学の例をも参考にして充分審議されなければならないと思う。

学校法人で作られる評議会に、学園同窓会に対し8名の評議員選出の依頼があり、各同窓会一名、その他二名の選出がなされた事を付記致します。



## 明 日 へ の 望 み

野 口 尚 一 著

(この度、本校の学長であり又理事長でもある野口尚一先生の著書.“技術と人の中に”，一工学院大学野口尚一隨筆集出版編集委員会発行一が世に出る事になった。この刊行は、本学院大学二部の自治会の努力によるものである。その内容は、先生の大学関係に生きてこられた昭和12年より今日迄の雑誌投稿及び講演の記録書であるが、本誌ではここにその紹介をも兼ねて、その中より一文を抜きし、転載する事にした。——編集部)

今、世間では人づくりということが各界各層で盛んに議論されている。立派な人をつくることが目標といつても、例えば私たちのように工業教育を受け持っている者にとって、その任務間での人づくりとは一体何を目標としたか十分に考えて見る必要がある。

もちろん技術者という特別な人間が存在するわけではないから、立派な技術者であるには立派な人間であることを根本とするが、現在の工業教育の中で全般的な人づくりを考える程の余裕が残されているのであろうか。

私たちとしては現在、わが国の工業が必要とするような技術者を養成するのが、許された時間の中で精一杯というところであると思っている。必要と云えばとかく、数のことが考えられるが、むしろその質に本旨があると思われる。

わが国工業の第二次大戦以後の趨勢を見ると、物的資本を終戦直後の情勢から戦前なみに回復できたのが昭和30年頃で、それ以後の増加率がきわめて高いことが認められるが、いわゆる国民所得の伸長はさらにこれを上回る増加率を示している。このように主として工業生産によって左右される国民所得が非常に高い増加率を示すのは先進工業国と云われるすべての国々に共通な傾向であって独りわが国だけの現象ではない。これは生産性向上のもたらした結果である。生産性に関連する要素は多いが、高度の設備と優秀な知識を有する労働力がその主たるものである。飛躍的ともいえる科学技術水準の向上とその広い範囲の普及とによって、急速に実現されつつある今日の技術革新のような画期的結果は、単に物的資本と労働力との増大による生産拡張では到底望み得ないものである。

高度の生産性に関しては、設備あるいは機械を造り出す人々、これを有効に働く人々、さらにこれらの物と

人とを効果的に結合する組織と運営、別の表現をすれば、科学的な創造工夫、技術的熟練、労働に関連する人的資質等、最近人間能力と呼ばれている要因が欠けたならば、現代のように生産性を伸展させて行く事はできない。この点から見て未だかつてみられなかった程に人間の質が重要視され、人間能力という要因が他の経済的要因とならんで新たに注目を浴びることになったわけである。国民所得の増大に最も重要なのが生産性向上を招来する人間能力であるとすれば、この高度化を企図するのは当然であるが、この根底にあるのは教育にほかならない世界の先進国において科学技術に関する高等教育の拡大強化に全力をあげている理由はここにある。科学技術者に対する国家、社会の要請がこの通りであるとするならば、工業教育においては結局において、総合的な物の見方を深く掘り下げて検討する能力とをもった人材を養成しなければならないが限られた在学期間を考えれば大学で取り上げ得る対策としては、基礎を十分に把握させることと、学生自身に確固たる構えを持たせることしか考えられない。基礎が確実であれば、それからの展開は本人の努力でいくらでも可能であるし、この努力は現状の認識と将来の展望に基づく情熱に由来するからである。

結論的には将来学生諸君が置かれるべき工業の各分野における、上述のように重要な諸君の存在に対して、明瞭な認識と不抜の自覚とを与えることが私達の最も重要な仕事でなければならない。それにもかかわらず限られた時間内にできるだけ多く広く知識を与えたいためから、私たちの教育の中でこの大切な条件がややもすれば後回しにされがちであったことが、現在の工業教育に種々な批判の出る原因とも云えよう。技術者の人づくりはこのあたりにあると思う。

## 同窓会に望む

建築学科主任教授

正木三省

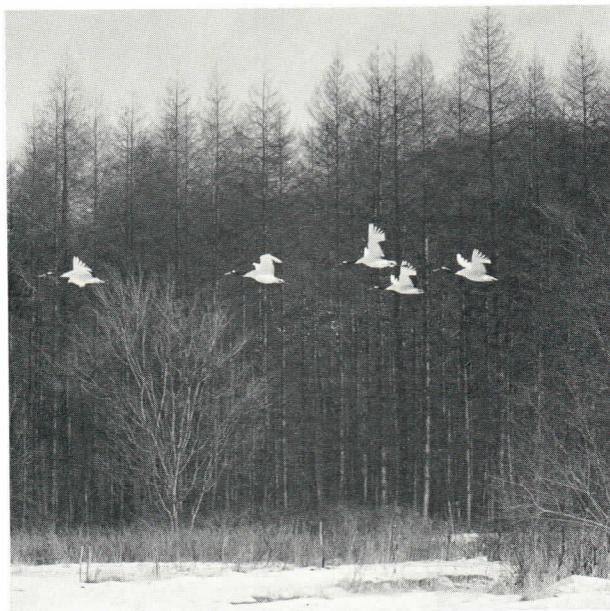
建築学科の同窓会が発足して2年になる。多数の卒業生を対象として、ほとんどまとまりがなかった状態から着々と体系を整えてきた努力は、まったくたいへんだったことと思う。

学校の発展とは、規模の拡大ではなく、学生や卒業生の社会での評価を高めることなどだと思う。卒業生諸君が社会で活躍するにあたっては、同窓会は有益なものとなるはずである。

会誌第1巻で横田先生が指摘しておられたが、同窓会のはたらきを強くしていくためには、とにかく同窓生名簿の充実、完成が根本である。そのためには卒業生諸君の協力が必要であり、自分のことにもちろん、名簿で不明の人の消息にも関心をもち、本部との連絡を怠らないようとする必要がある。

学校でも建築学科では数年前から、学生諸君の就職状況を少しでも向上させるために、就職試験を受けるについての指導なども行なっている。こういうことは、卒業生諸君が少しでも活躍しやすい境遇を得ることを助けるということを目的としている。さらに、卒業生諸君は後輩が望むような職場を開拓して、だんだんに諸君の後輩を引きいれて育てていくようにしてもらいたいと思う。

大学問題が強く世間の注目を浴びているときに、あいにくと主任の番がまわってきて、私自身は頭がいたいことが多い。しかし、私たち教員はここ1、2年はとくに学校をよくすることを真剣に考え、急には目立たぬながら努力している。卒業生諸君も母校の状況により強い関心をもち、いろいろと協力してもらいたいと思っている。



## 先生・親馬鹿の巻（その二）

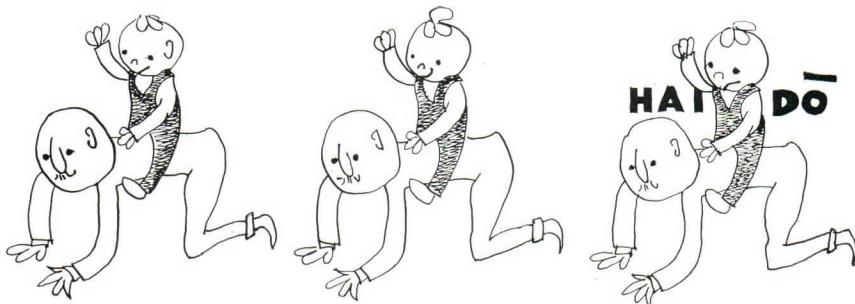
建築学科助教授 武 藤 章

現在、私の家の生活は2人の子供を中心に動いているようなものである。私の家に限らず、幼児をもつ家庭の生活は、この頃、どこでも子供中心のようである。封建的な家族制度の崩壊と共に父親の家長としての権威が消滅したからだが、そればかりでなく、私の考えでは、どうも戦後の住宅のせまさが、こういう現象を生じさせる大きな原因のひとつであるように思う。例えば私の家では子供部屋もなく、ましてや私の部屋もなく、辛うじて寝食分離が維持されているだけで、必然的に家全体が子供部屋になってしまって、わが家の生活は2人の小悪魔に蹂躪される結果となっている。いやでも子供と顔をつき会わせていいなければならず、下手すると便所にもおちおち入っていられない始末となる。来客もいつのまにか巧妙な子供達の誘惑にのって遊び相手にさせられてしまうのが気の毒で、つい人を招待するのを遠慮する。

むろん、わが家でも子供を自由放任しているのではない。といってよく「わが家の教育方針……」などといつてれいれいしく語られるような教育方針をもっているわけでもない。私は教育者であるが、元来、人間の間の一方通行を意味するような教育とかしつけとかいうものに

は反感をもっている。それは私が性來貞慾で「授ける」ということが嫌いだからかも知れない。私は子供には何も授けないつもりでいる。私も人間であり、子供も人間である。この人間同志が裸でつき合っていると、私も結構子供にいろいろ教わることがある。それ故、現在、子供がわが家の支配者だが、私もむざむざそれに屈服してはいない。時々反旗をひるがえして、子供達と一緒に戦を交える。メガトン爆弾をお見舞いすることもある。もち論、勝利は私のものだが、敵もさるもの、ゲリラ的戦術を用いて反抗し、はては涙の放水で私の怒りの火を消そうとする。

時折り、かっての独身時代日なたの縁側でごろ寝をして時の流れに放心をしていた自由さを思い出し、「たまにはお前達のいない家に住みたい」などと子供に向って毒づいたりするが、その口のかわかぬうちにもう何時まにか子供達の相手をさせられている。それで結構しあわせなのかも知れない。



# 工学院大学 白樺湖“山の家”

設計 工学院大学建築学科

デザイン担当 武藤 章助教授  
南迫 哲也講師

協力

戸沢 正法助手（7回卒）  
豊田 勝己助手（8回卒）  
尾田 和彦（7回卒）  
直井 俊次（8回卒）  
岡部 潤子（10回卒）  
西村健太郎（11回卒）  
岡本 宏平（一建4年）  
白倉 英清（一建4年）  
林 賢次郎（二設3年）

構造担当

十代田昭二 助教授

協力

田中 正美助手（7回卒）

設備担当

中島 康孝助教授

協力

森田 洋助手（9回卒）  
宮下 陸士（二設4年）

工学院大学の後援会では、今後の事業として、逐次大学のリクリューション施設を充実していくこうという方針をたてられ、まず、昨年度は白樺湖山の家を鉄筋コンクリート造に建て直すということでその設計を建築学科に委嘱されてきた。そして多士済々の建築学科の中で一番ひまそな男にということで人選のお鉢が私にまわってきた。

御承知のように、従来、工学院大学の施設を建築学科で本格的に設計したことはない。とても信じられないことだが、何ともやり切れない事実である。それ故、僅か延面積  $200m^2$  程の小さな建物でも、これを設計することは、従来の学園環境の整備に建築学科が参与する口火となるものであるという波多江主任教授の御意見に賛同して、私も慎重に仕事にとりかかることにした。

後援会の要求は、現在のかいこ棚の寝室部分を畳敷きのいくつかの個室になおし、集会室をひとつつくってくれればよいということであったが、私はこの要求をうの

みにすまいと考えた。例え部分的に改築していく場合でも、やはり将来の全体計画をし、その中で最も重要で、しかも現在存在していない部分から手をつけるべきだからである。

建築学科の諸先生の意見を参考にしながら私は大学の山の家施設のあるべき姿から考えはじめることにした。最近各地の保養地に山の家が沢山建っている。会社の保養施設が多いが、形態をみると、要するにやすく泊まれる旅館である。そこへ来た人々は個室毎に、家族単位、またはグループ単位で気ままに生活する。社会人の施設であればこれが最も自然な形態であろう。しかし、大学の山の家は、それが大学施設の一部である以上、そこで生活は当然何らかの方法で教育に関わりをもつべきである。となるとただやすく泊まれる旅館をつくるわけにはいかない。

私は山の家の教育への参与の方法に2つあると考えた。ひとつは直接的な参与で、セミナーハウスのように、授業の一部、あるいは課外の授業として、教授と学生グループ、あるいは学生だけのグループで合宿の勉強が出来るようにするということである。もうひとつは間接的な参与であって、そこで一緒に生活することによって学生間の人間的な結びつきが新たに開発され、また深められるということ、また共に食事をしたり共に寝たりすることによって社会生活のルールを学びとるということ、それにまた建築を教える者の立場として建築空間の秩序というものをその中で生活することによって体験的に理解して貰うことも望みたいと考えた。

そのいずれにしろ、個室でへだてられた生活でなく、共存の生活の方が大学山の家の生活にふさわしいと判断される。それならば、要求通りに個室を増殖するよりも、住宅といえばリビングルームにあたるリビングスペースをこの際つくるのが先決であるという結論に達した。幸いにこの考え方は関係各位の賛意を得ることが出来、既存の寝室をそのまま残すことによって、個室の数をへらし、約  $50m^2$  のリビング兼ダイニングルームをとることが出来、それに約  $20m^2$  の集会室を設けた。この集会室の方はとりあえず畳をしいて寝室にも出来るようにしてほしいという学長からの要望で、12畳の畳の部屋となつた。

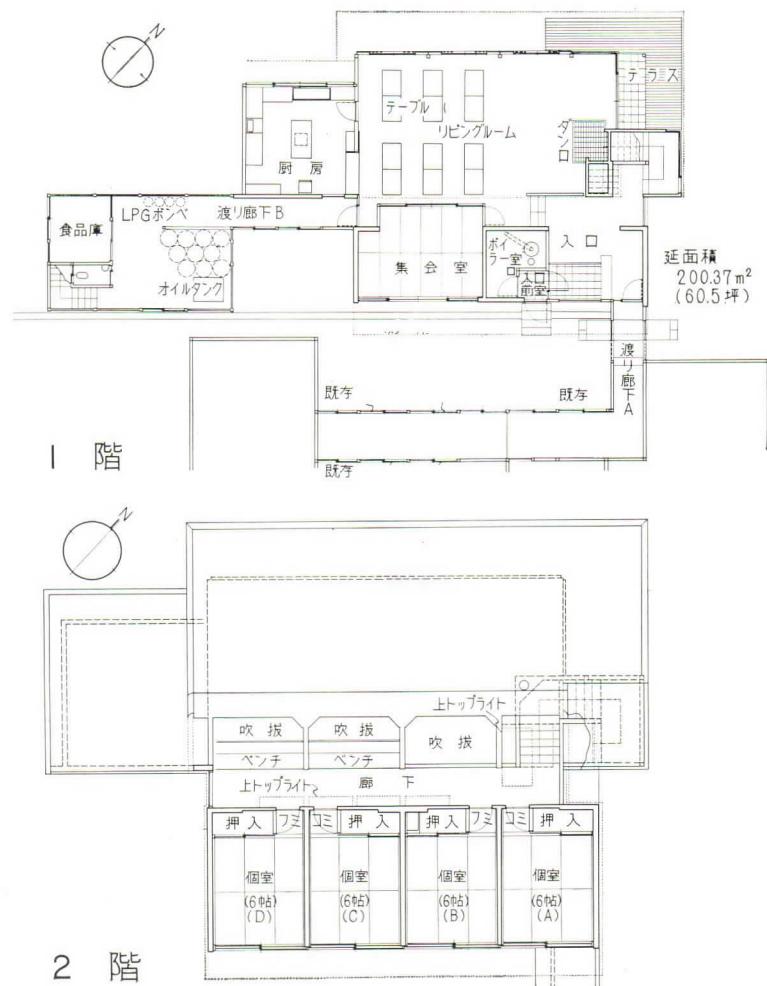
この新しい建物は従来の建物の北側に位置させることにし、リビングルームは北の白樺湖に面した斜面に浮き、それに対して4つの個室が南の小山に面した2階に並んでいる。そして個室の北側の通路はリビングルームに吹抜けている。これはあくまでもリビングルームを中心

心として全体の空間がひとつに統一されるようにと考えてしたことである。

当初の予算は950万円で暖房までも、ということであったが、とうてい不可能で、暖房を除いて950万円ということで、7回生の橋場愛さんのお宅に無理をお願いすることになった。200m<sup>2</sup>の鉄筋コンクリートの建物で設備、電気までも含めて950万というのはかなり乏しい工費であり、設計も無理をしなければならなかった。工費の節約をしなければならず、かといって、寒地の山岳地帯の建物であるから耐久度も考えなければならずということです、まず、2階の壁までを鉄筋コンクリート、屋根を鉄骨造とし、鉄板屋根にすることによって工費の節減をはかった。鉄筋コンクリートの外壁はペニヤ型枠のやり放しとしたが、これは近い将来、何か保護層で被覆

をしなければ、気象条件の激しい山地ではいろいろ故障を生ずる原因となるが、この際やむを得ないと考えた。屋根の鉄骨の断面なども十代田先生にお願いして、ぎりぎりのところできめて頂いた。そして、トップライトとか、暖炉とか、鉄板の鼻かくしとか、建物のデザイン上の最小限度を維持するに必要なものを残した。

工事が農繁期にぶつかったこととか、天候が悪かったりして工事が予定よりのびて昨年中には完成しなかったが、今年の10月末日には完成の暁をみる予定です。設計期間が非常に短かく、最後は徹夜で助手諸君や手伝ってくれた卒業生に労をわざらさせたが、こういう総意の建物がひとつひとつふえていくことによって、卒業生、教職員、学生の学園に対する愛着がより深められていくことになればわれわれは幸いだと考えている。



## “職場だより”

中村 幸平（建築37年卒）

第2回誌の発行にあたり職場だより欄の寄稿依頼を受けた今、さて何を書くべきか、およそ同窓会役員とは名ばかりの、きわめて怠慢な小生にとって迷う所ですが、意に添えぬ所は御勘弁の程願いたく思います。

当研究所は新宿の一角に位置し創立19年の歴史を持つ、所員約30名（工学院3名）、構造、織本匠構造研究所、設備、建築設備研究所（以上同系事務所）週勤五日制、朝のタイムレコーダーに始りタイムレコーダーに暮れて行く毎日は残業時間の多い事は別として、何らサラリーマンと変りはない。月間の無遅刻者には報酬手当制度あり、又遅刻の常習犯には、昇給一時停止、賞与時ににおいて減報酬がある。仕事配分は企画、実施設計、監理の人事区別ではなく、一環作業としていくつかのチーム体制を取り処理して行く、それに調査企画の仕事が加わ

る。又受注先は、官庁、民間約半々、それらの内容や設計システム等に関しては事務所の機密上触れる訳には行きませんので御了承の程を、平均年令は26.7才で若き年代が多く寸暇を見付けては、スポーツに、山に、海に、旅行等々に結びつけ少しのレジャーを楽しむ事を忘れはしない様だ。又経済的意識とは別に結婚適齢期とあって、次々にゴールインして行きます。出費のかさむ事、これ又人情なりけりです。昨年はその中で工学院の後輩2人も合い続いて独身生活に別れをつげております。内1人は独身生活の最後を1ヶ月間のヨーロッパ1週の旅に出て終止符を打ち見聞を広めて来た様です。

と云う様な訳で皆わき合い合いと楽しくやっております。併し最近のめまぐるしい変ぼうの中で将来に対する疑問や悩みを持たない訳ではありません。まず労働組合

### 施工雑話 “設計図通り出来た”と云う事

設計事務所々長「設計図通り出来ました。本当に有難とう。君も大変だったね。」

工事主任 「おほめにあづかって恐縮です。御不満な点もおありでしょうが、私達、現場担当者は一生懸命努力して来ました。所長のお言葉で今迄の苦労が報われた感じです。」

最後の仕上もこの二週間を突貫の内に過ごし、主任以下現場員は緊張の連続であった。そして今日は、二、三の点を残して最終検査も終了した。完成したオーディトリヤムの最終座席より舞台に向って、今、設計事務所々長と、工事主任は感無量の面持ちで座っている。3,5米角の角錐のパネルの連続は頭上から舞台へ向ってうねりながら天井を構成し、三角の影は、塗装のページュ色と混り合いながらパネルの画一性を淡

く高かめている。

“設計図通り出来た”と云う事は施工者にとって最大の嬉こびです。では一体建築で云う設計図通りはどう云う事なのでしょうか。

これは設計図に記入された寸法通りに施工しました。と云う事でなく、設計図に示められた設計方針通り施工しました。と云う事なのです。現場員にとって必要な事は図面を見るのは書入寸法を知る事だけではなく、どうしてその様な寸法になったのかを理解する事なのです。未熟な現場員に良くある事ですが、ファイヤ・ブレースの耐火レンガのおさめ方など、20分の1の詳細図に書き込まれた各々の寸法を後生大事に守って、耐火レンガの規格寸法など全く無視して施工しようとする。そして注意などしても、注意の意味が解からず、「設計図通りです」と自分の正しさを強調す

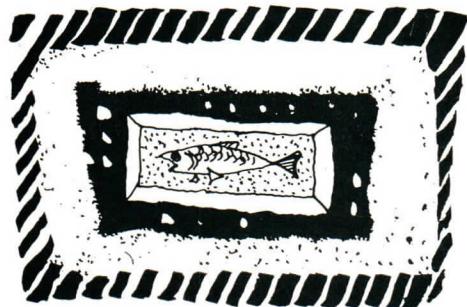
が確立されていない事、低所得がゆえに生活の保証が出来ていない事、恩給制度、退職制度確立の問題、住宅問題、勤務時間の正常化、建築に対するデスカッションの場を持つ事等々問題は山積しております。それらの問題とは又別に、時代の波に押し寄せられた高度資本主義体制下において発注方法も変遷をとげ、それを受け立つ巨大な生産組織(大設計事務所、又大施工会社の設計部)の前にどう対処して行ったらよいか、又建築生産工業化の発展や設計作業技術の高度化等によって、中小企業事務所のたどる道も又、苦難な物となって來た様です。それらの身近な事頃を我々の問題として考える時、ある種の不安は免がれないのであります。それは又今後の歴史を待たねばならないけれど、尚一層我々若き世代が連帶意識を持ちそれらの社会体制に対処して行かねばならない必要性を痛感します。これらの問題は我々の職場だけではなく、きわめて不安定な場である事には、他の中小企業事務所も大差がない様に思う。

併しこれらの社会的な背景は別として、純粹に建築の仕事その物を見つめる時、又現場に出て何千何万の人々

る。そこで考えなければいけない事は、私達が使っている寸法の単位は、実は実際の世界に存在するものでなく、つまり、絶対的なものではなく、仮想されたものなのです。何かをするのに、お互に考える場合、くい違いの起こらない様にする約束事なのです。それをこの現場員が数字の内容をその場合、場合に即して考えず、常に絶対視した所に、真違の原因があったのです。(この事は何も現場員のみでなく、若い設計者や現場監理者にもあてはまる事ですが) では本当の現場員はどの様にあるべきなのでしょうか。施工技術を身につける事は当然の話ですが、更に、与えられた設計図を見て、その設計者の立場になって物を考える事だと思います。(ただしそこには施工者としての範囲があるのは物論の事です) そうする事によって、その建物は設計者のものだけでなく、施工者のものにもなっ

によって造られて行く、その働く人々の汗の結晶に接する時、この世界に働く事の限りない嬉びと責任的な意義を感じずにはおられません。そしてほんのかすかなものであろうと、その社会的な芸術性と創造の源泉なる本質を信じ求めて行きたいものだと思うものであります。

(現代建築研究所勤務)



てきて、建物には、いきいきとした生命が宿る様になるのです。

現場員の諸君、工事中に建物を建ててやるのだと云う気持でなく、自分がこの建物を造りあげるのだと云う事で、毎日を過ごして下さい。それが結局自分を励げまし、自分の身のためになり、広い意味では、社会に貢献する事になるのです。そして最後には、施主に嬉こばれ、設計者に嬉こばれ、自分の会社からも嬉こばれる様な立派な現場員となるでしょう。



# 建築雑感

木村 幸弘（建築39年卒）

私は現在、母校である工学院大学建築学科に在職、担当は設計製図専門として、第一、第二、第三、第四に関係し、八王子校舎にも出張し、授業のアシスタントを務めています。学園の近況としては、現在、全国的に流行しているスチードンパワーなるものは幸いにして(?)我校に於いては表面化致しておりませんので御案心(?)下さい。

さて、原稿用紙に向って、ペンを取る段になって、大変困ったことに、どんなテーマで書いたら良いのか非常にまよいました。その結果、首題のようなテーマで思ったままを述べさせていただきます。教師そして研究者のはしきれ、建築についていくらか最もらしく考えてみたいと思います。けれども諸先輩に発表するものとしてではなく、私の身勝手な一人言としてフンフンと聞いていや読んでいただければ、大変幸せに存じます。

子供をもって始めて知る親の恩などという言葉が有る様に、私も子供をもち、生長につれて何やら感じさせるものが有りました。子供はハイハイしたり、オスワリしたり、オモチャをいじったりして遊ぶようになると、必ず物を口へ持って行きます。音の出るようなオモチャでも何やら小さいそして赤とか、黄とか目立つものがついていると、一生懸命になってむしり取り、口へ運ぶ。それはそれが食べられるかどうかを確認するかのように——。だがそこで親が見つけ、食べてはいけないことを教えるが、未だ6～7ヶ月のこと、言葉で言っても判る訳けがありません。しかし子供は、何度か、親のあわてたような姿を見て、自ら警かいするようになることも手使いそのような生活が言葉のやりとりが出来るようになる頃まで続いて、ようやく、食べられる物とか遊ぶ物などの区別が付き、生活の有り方を体験で覚えて行くのでしょうか。子供が既成のものを知るには、その物をこわす事によってその物を知るというよりむしろ、その中がどうなっているかなどの理屈はさておき、こわすことのみ、趣味を抱くのであり、親が子供に遊び方を教えはするが、結果的には自分なりの遊び方を子供は習得しているのではないかと思う。子供に習って以上のような理屈で建築を知るとすれば、建築という物をばらバラにすることから始めねばならない。ばらバラにする前に一言——建築をハダカにすると建物になるという一説を前置

きしておきましょう。

建物がどんな着物を着て建築になるのかは別にして、今、ここに建築をバッサリ真二つに切ったとすると一方は人文社会科学と他方自然科学とに分けられると思ひます。最とも平たく言うならば、人間と自然とに、とでも言い換えられよう。次に人間及びその集合体の社会についての分析と自然界についての分析が必要であります。がここで注意しなければならないのは、建築のカテゴリーから絶対に外れてはならないということです。ややもすると、深く追求してゆくうちに、自分は経済学者なのか、社会学者なのかとも思われるようなジャンルに身を落し、本来の建築がどこかに、おっこちてしまうことが良くあります。あくまでも建築が主題であり、そのジャンルの中で人間を考え、そして自然を考えなければならぬと思うのです。換言すれば建築は人間と自然とで成立っていると言えるでしょう。

建築にとって人間は内的要因であり、自然は外的要因である。然らば、内的要因である人間とは何んであるかであり、外的要因の自然とは何んのかを知る必要がある。現在、幸いにして、内的要因である人間についてのデーターも、外的要因である自然についてのデーターも、かなり多数そろっている。それは各部門に於ける専門家、つまり人文社会系から哲学、倫理、論理、心理、社会、経済、政治、文学、音楽や絵画などの美学……など自然系から数字、物理、化学、統計……など。などとかかげるといくらか大げさではと思われますが、決して大げさではない。もし大げさと思う御人が在りとすればその方は建築を軽んじている者であり、建築の知らない者の言うことであろうと私は主張したい。かって我々が受講した専門科目と比較してみると（いまさらと思うでしょうがまあまあ聞いていや読んで下さい）意匠、計画、建築史、法規その他諸々の建築論などは概して内的要因である人間の側に属し、設備、構造、施工、材料などは概して外的要因である自然と結びついていることが判る。そんなこと当たり前だといえばそれまでだが、かって我々は在学時代に一般教養などと呼ばれるこれらの科目をどのような気持で受講しただろうかと思い起すのである。特にデザインし関係に於いては、前述の一説「建築をハダカにすると建物になる」と私は言いましたが、我々の建築界の先輩も時折り「建築と建物」との違いについて論じられております。これは私の常識によると次のような言い方になると思う。「この建物は芸術という着物を着ているかどうか」ということである。然らば「芸術」とはなにかというおきまりの質問が出

て、そのうち觀念的な答えになり説得力を欠き、その声もやがて消えてしまう。そこで力を發揮するのが、一般教養なる存在の基礎學問である。一般的な建築知識のみでそれを判断することは表面だけで判断する軽率な行為であると思うのだが——。再に私見を述べるならば、人間と動物が違うように建築と建物は違うのである。つまり誇張して言うならば、建築は人間の住家であり、建物は動物の住家である。（この辺は異論が有りそうですね？）ところで、あなたは人間ですか？えっ！人間のつもりだがまわりが人間扱いしてくれないって？そうですか！私も同様なのです。実は——。建物に住んでいるから——（ずい分脱線致しましたので、本線？に戻ります。）以上のような専門的な分野に於ける夫々の概念を、建築はその要因として持っているのであります。

このセクションに於いて、再び建築のカテゴリーからはづれぬ様に進めるには、建築の種類別に各専門に分れて分析しなければならない。具体的には学校建築とか住宅とかであり、夫々独立の機能であれ、複合の機能であれ、具体的な生活を捉進する為に、自然との境界としての容器として創られる建築についてである。これらは一応彰国社刊の建築学大系などの資料を参照するとしていただいて、次に進みますが、実際の問題はこの時点から入るのかも知れませんね！建築学とすれば——。

以上が建築の存在する概念的事由が判ったつもりであるが、これだけでは、現在という色調が強すぎて、一面的であり、概念として平面的になってしまふ。それを補うべくもう一方の概念的事由は時間を軸としたセクションからの意義付けが必要であります。平らたく言うならば「建築はなぜ生まれたか？」という疑問が始まり、「どのようにして育っていったか」という（前述の子供の話のように——）疑問がもう一方のアクシスに於けるセクションの概念として、つまりどのようにして生れ、どのようにして育ったかを知ることによって、来るべき明日の、10年後の、すなわち未来の建築を想像したい訳である。ここで一寸付け加えると、未来の建築を考えるには、未来的セクション（横断面）がどうなっているかを想像することあります。

時間を軸とする概念、すなわち一言で言えば、過去は歴史学、未来は、未来学（？）という分野に属する訳けであるが、過去に対して、再び言葉を借りるならば、史的唯物論的な考察であり、史的唯心論的な考察の展開であろう。史的唯物論等はマルクス・レーニンの持論であろうが、問題は建築が過去に於いて発生し、そして発展してきているというところに有るのであり、過去及現在

の建築から未來の建築へと時間が結んで行くのである。むろん時間という帶で結んでもらう未来では、なく現在となり、そして過去になってゆく。では遠き過ぎし良き時代を探ぐってみよう。これも又、彰国社刊の建築学大系を御覧になれば、御判りいただけますが、これを省略すると話が無責任になってしまふので、続けることに致します。

前にも述べた様に建築は住まうべき人間と建築が存在すべき自然と（現代社会に於いてはむしろ自然というより社会といった方がフィットするが——。）の間に誕生しているのであるが、時代的には原始時代にまで坂登るかも知れない。すなわち、類人猿の時代——人間に成りきれない時代——自分達の手で自らの住いを作ったかどうかかも判らない遠い時代の生活を想像して綴ってみよう。

ではタイムマシンを今から60万年から1万年前までの時代すなわち旧石器時代と呼ばれている時代にコントロールしてみよう。

覚料参照（岩波講座 日本の歴史1—原始および古代1）

その頃我々の先祖は、河川にのぞんだ段丘の上や、見はらしのよい丘陵上に位置していた。湖の周辺も又、彼らの部落があった。これらの場所は、食糧資源としての動物を狙いやすい地点が逆らばれたであろうし、また石器の原料としての岩石—黒曜石、安山岩、硬質負岩などの産地に近いこともひとつの条件であったらしい。すなわち当時の人々は手に石の矢じりをもって狩りをして、生活をさえていた。この頃住居は、丘陵上は湖畔の平場に地表を浅い皿状に掘りくぼめて、その上に獸骨や鹿角を組み合せた骨組みをつくり、さらに皮革でおおってキャンプ生活を営んでいた。そして又、平場でなく、洞窟が住居として用いられてもいた。高床式の出現はずっと後であるが原型として木の上の鳥の巣的なものがなかったとも言えない。ともかく、生活の糧なる相手が自然そのままの物である故に、絶えず流動的であったとも思われる。現在にまでその証処をとどめるものは希れであるが——。

さて移動的であった原始人も、時の経つにつれて、頭の回転も良くなつた。いままでは、自然の物を採集するだけで、腹が空けば活動し、万腹の間はごろごろ、しかし自然は暖いときだけでなく、特に冬場の採集などに苦労したに違いない。ただ獲物を取るだけならば、未だ動物である。また土器などの発明もなく、水などの補給もその都度、夫々に、川へ行ったのだろう。やがて彼らは冬でも困まらない為にはどうすればよいかなど、頭を積

極的に使い始め、旧石器時代とも、おわかれし、時代は1万年から9千年に近づき再び新石器時代（土器文化）へと移行した。いよいよ、この辺から日本建築史としての遺跡も出始め、ころは縄文土器の出現に伴い、本格的な土器文化に突入した。（いまから6～9千年前）道具としての土器、石器はさておき、建築の方は堅穴の住居は縄文時代の末期で、それ以前のはっきりした遺跡はないらしい。この時代も又、季節の変化に影響され、移動生活をしていたが一部はすでに、家畜を飼い、農業を営んでいたらしいが未だ証明されていない。この時代は人口も増え、比較的大規模な集落が発見されていて、定住して農耕を営んだという説が出没している。

縄文文化は後期以降それ自身の生産力の限界によって発展性を失い、これにピリオドをうたせたのは、大陸よりあらたな水稻耕作の技術を伴なって波及した金属文化である。この辺までくると人間のにおいがブンブンになってくる。いよいよ弥生式文化に入り建築史の第一ページに現われ、以降は諸文献にゆだねると致します。

時代や文化はさておき、始めは衣類もまとわず、毛むくじゅらの猿人が次第に季節に適応する為に衣類が必要になり居住地域の拡大に伴い風雨を防ぐ必要が生じ、生活文化の発展に伴って建物の出現と相なるのであろう。詳細は文献によるとして根本は人間の生活の変化がそのまま建物の変化に現われており、建築の内的要因の変化つまり人間の変化を物語っている。ここで気づくことは、自然的変化つまり外部要因の変化はあまり語られていないことである。基本的には人間の量的変化及質的変化に伴に、自然と共に存する為の技術が人間の量的、質的な変化に環元されて、サイクリングして時代が進むのであろう。

さて現代の科学をもって未来の建築が生れようとしている。未来の人間の生活はどのようになるのであろうかそして未来の建築は——。皆さんに期待したい。えっ君はどうしたって？。こりゃどうも、勿論未来を目指して今日も生きています。お互いに頑張りましょう。

## 格言こうなあ！

近代論法 コンピューター時代にふさわしい近代論法は三段論法ではなく、Yes and no の2進法である。

インスタント革命 インスタント食品の普及は、インスタント革命をも普及させた。

引力 爾先生と云われる様な人達に、「ニュートンの法則とは何ですか」と聞いても良く答える出ない。一どうも引力を忘れててしまうらしいー

組織 未熟な組織は理論派と行動派に分裂する。ハイクラスな組織は理論派が行動派をリードする。

芸術家 それは、時間を“停止し”，“越え”，“戻す”，能力のある者である。

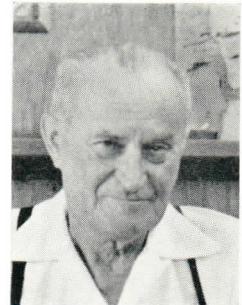
自然木 樹木が幾種類もある様に、建築も幾種類あっても良い。ただ自然木は、“柏”的幹に“柳”的枝はつけないものだ。

なぞなぞ “雨が降っても晴、雪が降っても曇り”これなあに「気象庁発表の〇〇〇〇」。

自由人 本当の自由人は、不自由人の中から生れるものだ。

(S)

## 建築家アントニン・レーモンドさんについて



北 沢 興 一 (建築36年卒)

麻布の高台に自分の住いと事務所を持ちニューヨークにやはり設計事務所とニューポーブに農場を持ち、一年に一回はアメリカに帰る。日本では麻布を拠点として夏は軽井沢山荘で冬は葉山海ノ家でと場所を変えながら建築活動を進めている。建築以外の趣味はゴルフを楽しみ、チェロを引き、ピアノを弾く、彫刻を作り陶器を造るそして余暇があればいつもスケッチを書いている。題材は動物、風景が主で良く書けると我々の所に持参し自満しながら説明して歩く。そんな姿が一番幸せそうな最近のレーモンドさんである。麻布の事務所は杉丸太を構造材としてラワン合板の壁と障子が全部の窓についており質素な事務所であり現在は65名位の所員が働いている建築、構造、設備電気の各セクションに分かれて所員はあくまでドロフトマンであり、基本設計に参加しているものはごく少数である。レーモンドさんの直接の仕事は小部屋で設計されており、そこで働く私達の設計方法は二通りがある。敷地と設計要求を渡されて基本設計から進めるものと、レーモンドさんのスケッチが渡されてそれを図面化して行くものがある。スケッチペーパーは普通の紙片にフリー手で書かれたものをデバイダーを使いながら拡大して製図することから始まり、時々レーモンドさんがそれを直していく。一日に四～五回は私達の部屋に来て図面をチェックするものが仕事によっては30分位で又見に来ることもある。その場合に指摘されていた所が修正されていないと叱られるのである。最近は少なくなったものの数年前まではレーモンドさんの考えに反したスケッチをしていると事務所中に聞える大声で怒り、これを所員は「レーモンドのカミナリが落ちる」と呼んでいる。あるときは鉛筆を折られたり、トレシングペーパーを破られてしまったこともある。設計が思うように進まない内にレーモンドさんが自分の製図台に近づいて来ると心配でマゴマゴした事が時々あった。私も8年間勤務した現在はレーモンドさんが性格的に柔らかくなった事も手伝ってか叱られることが少なく、最近

は冗談を言いながら図面を見てくれる。そして良く出来ている時はオーバーな表現でほめてくれる。しかしそまだ我々にとっては非常に恐いレーモンドさんである。レーモンドさんは、ここ数年は「カミナリ」が落ちるのが少くなり以前のことを考えると寂しく感ずることもある。今年は1月から7月迄アメリカに行き帰ってきてからは自伝の出版準備で原稿を書いたり写真の整理で余り設計室に姿を見せなく自叙伝の仕事に没頭している。

### A 夏の軽井沢生活

レーモンドさんは7月と8月は軽井沢へ行き丘の上に建つ山荘で生活する。これは戦前から続いている毎年の行事であり、我々若い所員数人を加えて総勢10名位で共同生活をする。いくつかの新しい仕事を持って私もここ毎年つれて行かれ「シゴキ」の対称とされている。それは楽しくもあり苦しいこともあります。仕事ではスケッチが思わしく進まぬ折はレーモンドさんのチェックを受けるのがつらく、懸命に図面を書いていると、ある時は、「今日は天気が良く景色がすばらしいのに君達はなぜ散歩に行かないのか」と叱かられて、あわてて外にとび出し深呼吸して始めて景色が目に入ることもある。

この軽井沢生活の最高の楽しみは屋外バーベキューである買い出しも自分達で行い庭に火を焚き炭をおこして、ビールで乾杯、食欲を満たす、仕事を離れてレーモンドさんと共に楽しみ語り歌い合うのである。レーモンドさんは燃える火を見ることが非常に好きで夜9時過ぎまでも暗い中で得意のジョークをとばして我々を笑わせる。この一時こそ軽井沢ならではの経験となる。レーモンドさんは子供が一人だけでありしかもニューポーブの農場にいるため日本では家族もなく我々若い所員を家族の一員として楽しく過ごしてくれる。9月15日は老人の日でありレーモンドさんに何かのプレゼントをしようと我々があれこれと知恵をしぼって考えた結果、所員の中にカクテルを作る得意な人がいたため全員でお金をプール

してカクテルパーティを開いてお祝いをした。レーモンド夫妻はお酒が非常に好きで、大変楽しいパーティとなつた。81才の老人レーモンドさんに来年も又その次も又その次もこのカクテルパーティを開いてあげたいと願わざにはいられない。

今年の軽井沢は私達と一緒にゴルフも9ホール回ることが出来たし、昨年レーモンドさんと共にハワイに行つた時もハワイ大学主催のルアウパーティで若い人達ヒダ

ンスに興じ、ゴーゴーダンスまでおどりそこには年令を想像出来ない若さがある。レーモンドさんが良く話す言葉に「新しいデザインの創作が出来なくなつた時は自分の生命の終りを意味する」という。新しい彫刻の創作に朝6時から夜まで没頭して完成する集中力を今でも持つてゐる。レーモンドさんはまだまだ建築活動を続けて行くことであろう。

1969年夏記

## あ わ れ な コ ブ ラ

ある暑い日のこと、小さな山カガシが食後の散歩にでかけて、とある大きな木の下の草の中で昼寝をはじめました。

その木の上にはリスがいました。リスは山カガシを見ると、けたたましく、キッ、キッ、となきました。ひとりの狩人がリスの声を聞きつけて、木の下にやってきました。

「リスがこんななき方をしているところを見ると、なにかいるんだろう。」

こう思って、狩人があたりを見まわすと、草の中に山カガシがねむっています。

「なあんだ、おまえか。おまえにや毒もないが、そのかわり、ちっともうまくない。」

こう云つて、狩人はそのまま行つてしましました。しばらくすると、べつの狩人がきました。リスのなき声を聞いて、なにか獲物がいるかと思つてきました。けれども山カガシを見ると、やっぱりさっきの狩人と同じように、

「おまえじゃ、おかげにもならん。」

と云つて、行つてしまいました。

ところで、山カガシのねている草むらのかげに、コブラが一ぴきかくれていました。コブラはさっきからのようすを、ずっと見ていました。このコブラは、朝から狩人に追いまわされて、やっと、ここまで逃げてきたところでした。じつは、コブラのきばには毒がありますが、肉がおいしいので、だれもかれもがコブラをつかまえようとするのです。

コブラは、狩人たちが山カガシを見ても何もしないで行つてしまうのを見ると、

「あの木の下は、きっと魔法がかかっていて、安全なんだな。」

と思いました。そこで、山カガシのそばに近よつて、ピスーッとつばをかけました。山カガシは目をさめし、ふるえあがって逃げだしました。

コブラは山カガシのいたところにどくろを巻いて、眠つてしましました。木の上のリスは、前よりもいつそうけたたましく、キッ、キッ、となきさけびました。

すぐに三人目の狩人がやってきました。この人は、一日じゅう獲物がなくて、がっかりしていたところでした。狩人は木の下で眠っているコブラを見つけると、大喜び。ぬき足、さし足、そとと近よつて、毒のついた棒をコブラめがけれ力いっぽい振り下ろしました。コブラはそれなり死んでしまいました。

「ありがとうよ、リスくん。おまえのおかげでこんなごちそうか手に入ったよ。」

と狩人はリスにお礼を云つて、コブラをもつて帰つて行きました。

「山カガシには安全な場所も、コブラには安全じゃないんだなあ。よくおぼえておこう。」

とリスはつくづく云いました。

<コンゴ民話より>

# 同窓会企画部発足にあたり

(38年卒) 清水一義, 高岡敏夫

同窓会が発足して、2年になり、卒業生も、3,000人を越える様になりました。だが我々の同窓会は、やっと、形だけ出来たにすぎません。同窓会が発展するのはこれからなのです。42年以前には、建築学科だけの同窓会がなく、その為、卒業後の社会での同窓生相互の交流がほとんどなく、又、所謂、マスプロ教育の為、教師と卒業生、教師と学生、又学生相互のコミュニケーションの希薄を招く結果になったのです。同窓生が3,000人もいるのに、卒業して社会に出た時、まるで、一人ぼっちで、社会に飛び出した様な感じがする。これからは、同窓会の発展を計り、一人ぼっちが、10人、100人、1000人に我々は何千という同窓生がいるのだ、という気持が持てる様にしたいものだと思います。

今度企画部が出来ましたのも、これらの問題に対して、速やかに、効果的に、なしうる方法、新しい姿の同窓会への、コミュニケーションシステムの確立が、是非必要なのではないか、という所から、企画部が出来たのだと思います。

同窓会は誰の為にあるのか?言うまでも無く、会員の為にあるのです。一部の会員や委員の為にあるのではなく、より多くの、いやすべての会員の為にあるのです。これは明確な事であり、百も承知の事です。でもそれが忘れられている事が非常に多い、いやはほとんどの会という会がそうです。会長がいて、委員がいて、会報を出し、会費を納める様に通知が来て、総会を行い、確かに活動はしている。でも、一般会員は、会報も読まず、総会にも出席せず、ハハー又、会から何か来たと思うぐらいでしょう。形式上の組織、名前だけの同窓会は無意味です。

我々の同窓会は、一般社会に貢献する様な大きな力はまだありません。将来もあまり期待出来ないかもしれません。しかし全員で組織している会です。すべての会員のために、何か出来なくてはなりません。大きな夢を持って、建築学科同窓が本当に会員の為にある会になる様に、企画し、それを実践に移し、目的を達成させられる様に、皆んなで力を合せて、やっていこうと思います。

現在、名簿作成、会費徵収、会誌発行、総会開催、厚

生、とそれぞれ部がありますが、の中でも厚生部をもっと充実していこうと思います。そして次の様な案があります。これらは、それぞれ身近な所から、会員が同窓会と密接に結びつき、又、多くの会員が運営に参加する事によって、建築学科同窓会が本当に、自分達、会員の為にあることを自覚出来る様にしたいと思います。

## 1. 海の家、山の家

これは同窓会設立当初からの、懸案で今年度からすぐ着手したいと思います。まず計設委員を作り詳細に計画する。

- a. 土地入手……場所、坪数、価格等
- b. 資金計画……全体予算、資金調達（会費から、一般会員からの寄附、会社団体からの寄附、その他）
- c. 建築計画……計画設計（学生コンペにする）実施設計、施工
- d. 利用及監理計画……費用、管理人、等寄附した人に特別な便宜をはかる。家族、友達でも会員が一緒ならだれでも、利用出来る様にしたいと思います。

## 2. ヨット同好会……

これは副会長、金田氏が実際に計画し活動しています。興味のある方はどんどん申し出て下さい。

## 3. 囲碁、将棋、ボーリング等、同好会

一つのきまった場所を設けて、いつでも出席出来る様にし、年1回大会を開き入賞者に会から賞品を出す様にしたりする。

## 4. 旅行（ハイキング、ドライブ等）も年それぞれ1回づつ計画し、だれでも自由に参加出来る様に。

## 5. ゼミナー

都市計画、意匠関係、構造、等に分けてそれぞれ活動、卒業後の教師とのコミュニケーションの場を作る。又学校のPR等の為、研究し論文、計画の発表をする。

以上の様な案を持っています。良いアイデアがありましたら、どしどしあ申し出下さい。お願いします。

## 『学 内 コンペ』

'68年度コンペ

天野先生や樋口先生がまだ学校にいらっしゃった頃に、先生方のポケット・マネーを資金にしてはじめられた「学内コンペ」はこれまでに学生達が自分達の力だけで自由に物を創り出す場として彼らのはげみになってきました。昭和43年度からは同窓会の援助もあり一層内容を充実したものとして続けてゆくことになり、4月に「住宅」武藤助教授出題、6月には「学生のための山のロッジ」波多江教授出題によりコンペが行われました。それぞれのコンペは建築学科の計画系の先生方全員によって審査され講評会と入賞者の表彰がありました。作品は4~5年前のものに比べてバラエティーにこそ富んでいますが、いずれも、もう一息というものが多く今年度のコンペが楽しみです。

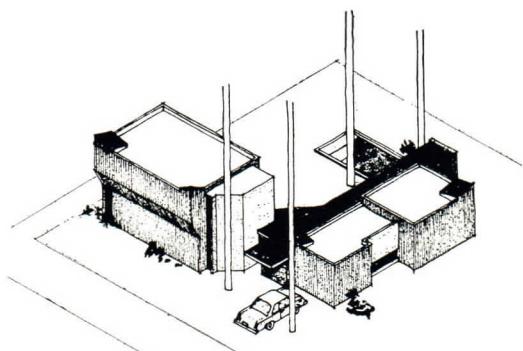
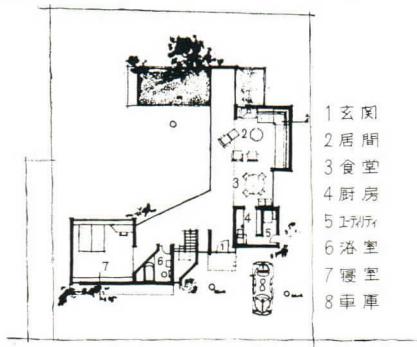
(助手・戸沢正法 39年卒)

第1回 4月25日「住宅」 6月8日 応募締切  
審査 建築学教室 出題 武藤助教授  
24点 30名提出

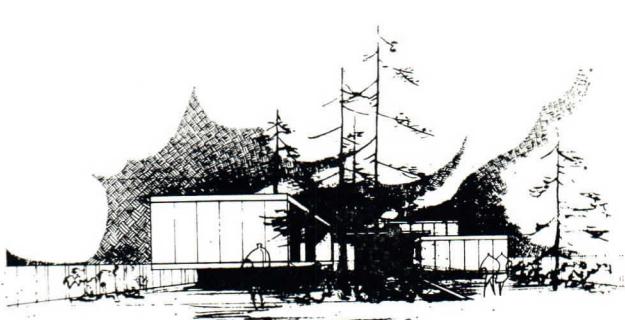
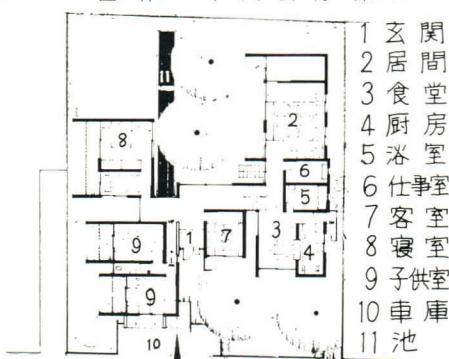
### 入賞者

秀作	林 賢次郎	II部設備 4年
佳作	平川宏行 柴田徹	II部設備 3年
入選	杉山正博 升谷昇 前川啓志 三浦宏一子	I部建築 4年 II部建築 4年 II部建築 3年 I部建築 3年
努力賞	吉田和久 酒井正夫	I部建築 3年 I部建築 4年

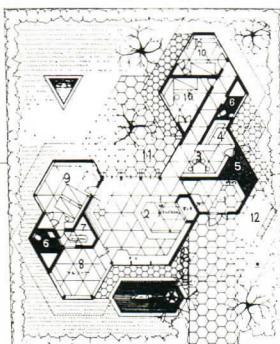
秀作 林 賢次郎



佳作 平川宏行・柴田徹



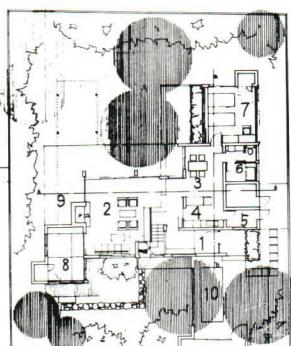
— 入選 杉山 正博 —



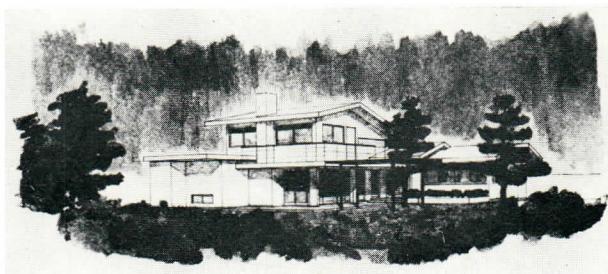
- 1 玄関
- 2 居間
- 3 食堂
- 4 厨房
- 5 上利所
- 6 浴室
- 7 納
- 8 リビング
- 9 寝室
- 10 子供室
- 11 テラス
- 12 車庫



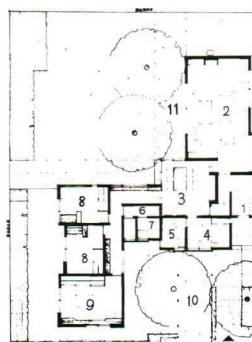
— 入選 升谷 昇 —



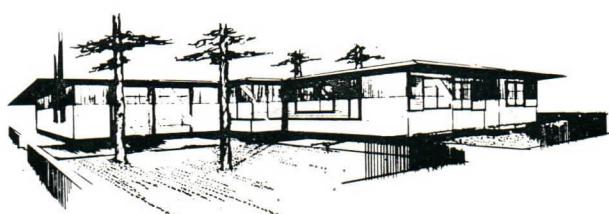
- 1 玄関
- 2 居間
- 3 食堂
- 4 厨房
- 5 上利所
- 6 浴室
- 7 寝室
- 8 和室(6帖)
- 9 テラス
- 10 車庫



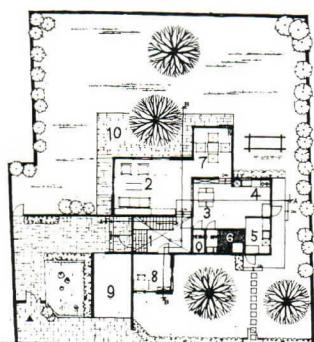
— 入選 前川 啓志 —



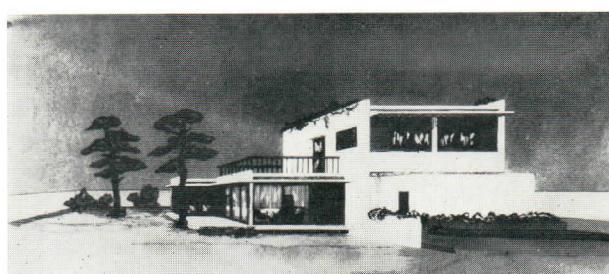
- 1 玄関
- 2 居間
- 3 食堂
- 4 厨房
- 5 上利所
- 6 洗面脱衣
- 7 浴室
- 8 子供室
- 9 寝室
- 10 車庫
- 11 テラス



— 入選 三浦 宏一・田村 俊子 —



- 1 玄関
- 2 居間
- 3 食堂
- 4 厨房
- 5 上利所
- 6 浴室
- 7 茶の間
- 8 書斎
- 9 車庫
- 10 テラス



## 八王子問題について

建築学コース3年 柿崎 豊治

八王子駅に着いた時、「随分遠い所だな」とまず感じた。これは主として私自身東京に住み、東京の高校に通っていた為だとは思うが、それにしても、都内との距離を感じないではいられなかった。

学校についてみると、何となくおもしろみのないところで、単純ながら、こんな所で大学生としての勉強が出来るのかと思ったのを覚えている。

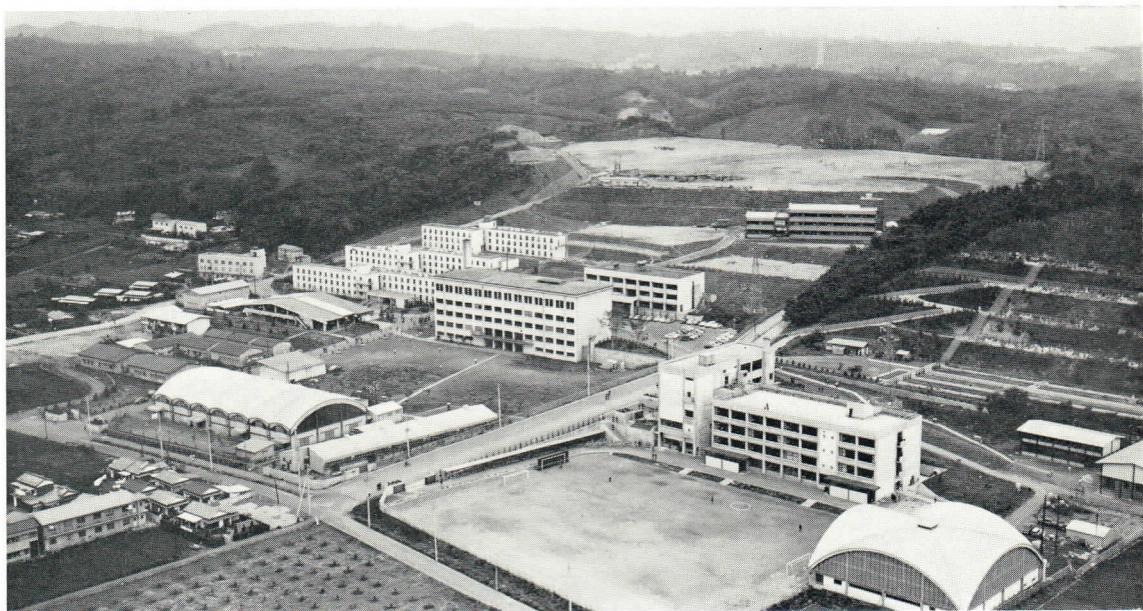
授業の方も、ようやく軌道にのり、夏休みも近づいた頃、私は研究会に入会した。私の入会した研究会自体は、その年の5月に出来たばかりのもので、先輩といえば2年生が居るのみであったが、しだいに他の研究会の友達も出来るようになり、他の研究会で問題となっている事の一つに、新宿との分離によるものがある事を知った。この問題は、かなり深刻化していた様であった。原因は具体的に言うと、新宿在学の先輩が、八王子までくるのが容易でない為、研究の運営上、八王子として独立してやってゆくか、それとも新宿の先輩に回数は少なくとも八王子まで通ってもらって、その指示を受けながらやってゆくかという事であったと思う。この問題は、今尚尾をひいている様である。

現在、我々の研究会も、新宿に4年・3年の在学生が

居るが、確かに八王子へ行く機会は、なかなか持ちにくく、その結果、会員間の意志疎通に大きな支障をきたす様になっており、合宿等が非常に重要な意味をもつ様になってきている。

現在、私は後輩の事を考えなければならない立場にあるが、私自身、この務めを怠けているので、あまりこの事については書けないのだが、同時に意志疎通の不完全さによる問題を痛切に感ずるので、少し書かせていただきたいと思う。後輩との話し合いは、月に1~2度行なえれば、まあ良いだろうという事になってしまふのであるが、しかし、これでは不充分なことは明らかなのである。なぜなら、研究会活動というのは、研究だけが目的なのではなく、人間的交流という事も大きな目的である筈だからである。こうした交流は、やはり月に1~2度会って話すことによってでは生れにくい。不断の何気ない会話が重要な意味をもっている様に思われる。こう考えてみると、新宿と八王子の距離は大きな障害となってくるであろう。

しかし、これが逆に良い結果をもたらす面もある。つまり、新宿との隔たりによって、1・2年生がある程度独立しなければならなくなり、先輩から「教えられる」というのではなく、「自分でやる」という姿勢をもつ様になってくるのである。研究活動に於いても「ついてゆく」のではなく、自分達の選択した課題を、自からの方に向に於いてやってゆくという事になるだけに、意欲も湧



くのである。従って、我々の場合、3・4年生は、アドバイザーとして存在することになるが、広い意味で考えた場合のテーマの中に関連性をもたせる事によって、研究内容に於ける接触も可能となっている。

さて、研究会から枠を広げて、建築学科生全体の組織としての、学友会に於ける問題を考えてみると、ここにもやはり同様の問題がある。私は学友会委員として働いた事はないので、詳細を記述する事は出来ないが、気づいた例を上げてみると、まず会員全体の集会としての学友会総会等も、毎年参加人員は、委任状によるものを含めて、ようやく成立するといった程度の少なさである。もちろん、個人個人に自覚がないと言ってしまえば、それまでであるが、八王子に下宿する学生にとって、新宿まで出てくるのは、めんどうになるというのが、偽わらざる実状である。

執行部にとっても、連絡の不徹底により、度々行き違いを生じたり、電話連絡のつかない時は、授業をつぶして八王子に行く等、頭の痛い問題がある様である。

学祭に於ける建築展も、新宿、八王子各々行なうことになるわけで、予算の面でも、ダブルものがあり、かさんでくる。又、学祭テーマも、新宿、八王子が各々設けるため、統一性が失われる危険もあるが、各々独立したものとして考える事により、統一性には、こだわらない様にしようと務めている。各研究会の発表も別々に行なわれるものが多く、研究会内部の問題、つまり、研究テ

ーマの統一性、活動の運営上の不都合さ等も、表面化することがある。又、展示のために費やされる時間も2倍になるわけで、学際前1週間は、かなり忙しい。しかしながら、八王子学祭を実施するに当っては、当然、八王子が主体となるわけで、ここに於いても又、1・2年生が、自分達でやるという姿勢がみられるわけで、八王子学祭は、年々、立派なものになってきており、1・2年生の行なうものとしては、なかなかのものになっていると言えるだろう。

この様な、組織の中の問題は、結局、統一と独立という、相矛盾する二つの性質によるものが大きい。全学年が同一の校舎で勉強することは、当分の間、考えられないことなので、統一する事のみを考えていっては、かえって現状を無視することになるだろう。従って独立したものとして考える事が必要であるし、現状を生かすことにもなる。八王子は八王子として独立し、種々の行事等も各々の主体性を生かして行なうという考え方方は、現在の大勢であると思うが、一つの大学としての新宿八王子の統一を考える時、何如にして統一の中で独立を保つか、独立した二つのものの、何処に統一点を求めたら良いのかを、各々の組織が模索している段階である。

以上、所在地の分離による、問題点のうち組織に対する影響を述べてきたが、他にも、八王子という位置による、種々の問題もあるが、紙面が限られているので、次の機会に回すことにして、私の拙文を終ることにする。

## 鬼門の由来

迷信も数が多い中で、鬼門というヤツは案外と根が深い。史籍から判断すると、鬼門の起源はいかにして古く、かつて、中国の民衆が怖れた匈奴の襲撃が思想的には根本になる原因である。中国の東北地域に根城を構えた狄(てき)、または匈奴と呼ばれた遊牧民族は、牧草の不足期になるとあって肥沃な黄河沿岸を荒しまわった。平和な農耕民族にとって、気性の荒い遊牧民族はまさに、不俱載天の敵であった。万里の長城も、武帝の遠征もすべてはこの敵に対する対抗処置であった。一説によると、古代の東北地域に「箕(き)」と云う気性の荒い国があって、この国の門が開かれるとなたちまち人馬が押し寄せて一帯が荒らされた。人々はこの國の方向を「箕門(きもん)」と云って怖れ嫌ったといわれている。

「箕(き)」が「鬼(き)」に变成了のはいつごろかは

っきりしないが、鬼も相当古くから中国ににあったらしい。(中略)

またこの思想がわが国に伝えられてからも、鎌倉時代以来に長い禁忌の余命を留めたことについて、もう一つの理由がある。昔のわが国を中心地である近畿地方一帯は、一年間のうち大部分の風向が東北から西南に流れている。東北方向、いや鬼門には便所を造るなどいうところまでは、ささやかながら科学的であって開放的な日本住宅では、ありうべき経験の指針ともいえよう。

たまたま、中国的な恐怖観と日本の衛生概念が一致した所に、鬼門を今日までのさばらす原因となったのである。

(建築古事記 岡野忠幸著より抜粋)

## 八王子問題

建築学科3年 貝瀬昇

入学した当初は大学に入った喜びや、大学生活に対する期待、不安で頭はいっぱいだったし、新しい土地での生活にとまどいもあったがこの頃はようやく学校にも慣れ、日常生活も軌道にのってきた。それと共に大学に対して失望させられた点も多い。

他の多くの大学と同じようにここでもマスプロ教育が行なわれているが、一応このことはマスマディアを通じてある程度知っているものの、マスプロに教育がこんなにも味気ないものだとは思ってもみなかった。教授の声がよく聞き取れないような時には、まるっきりやる気を失ってしまう。なぜこんなに学生がいるんだと憤りする感覚。自分も「衆」の中の一人なんだと思うと、授業に出ても自然受身的になってしまふ。

又この八王子校舎は環境はいいところにあるけれども、学校が新宿と八王子に分かれているのは不便である。新宿・八王子の会合を開く場合にもいちいちどちらかに行かなければならなくて不便だし、クラブ活動、サークル活動等にも支障をきたしている。なんといっても3・4年生に接する機会が乏しくなるのは我々一年生にとってこの上なく残念である。やはり上級生におよぼす影響は大きいものがあると思うし、それによって大いに成長するものだと思う。このように八王子校舎では大黒柱的存在を続いているためになにかまとまりがなく、バラバラの感じを受けるのである。そのために組織力が弱いように感じる。例えば、クラスなんかでも高校の時とはかなり違っていて、クラス意識に乏しく、クラスという感じがさっぱりしないのである。「群れ」という感じしかしない。もっともクラス単位で授業を受けるのも週に数回しかないのだから無理もないかも知れない。このように一般学生のまとまりがないために自治会活動も低調なのだと思う。もっとも幹部の人達は活発らしいのだが、いっこうに一般学生の我々にはその内容が伝わってきていないという感じがある。自分達のやっている活動の内容を一般学生にどんどんアピールしなければ、ますます一般学生の自治会活動に対する関心を減退させてしまうことになると思う。こういった点に幹部の怠惰が指摘されるが、新宿と八王子に校舎が分かれているためになかなか連絡等もスムーズにいかないだろうし、なんといっても一般学の下からの盛り上げというのがなければだめだから、必ずしも幹部だけの責任ともいえないよう

だ。

又園書館の本も二分されてしまっているので、どちらも不十分なものとなっている。こういう面からみても新宿、八王子に分割されていることは不便であり、さまざまな方面に支障をきたしている。学生の活動が活発に又、スムーズに行われるためにも、上級生との対話の機会をより多くつくるためにも、早急に新宿校舎も八王子に移転すべきだと考える。

## 八王子問題

建築学科3年 川崎正三

八王子校舎は、八王子市内にあるとはいっても、周囲は全くの田舎です。国鉄八王子駅からバスで約25分、静かな田園風景が広がる中にポツンと建っている。静かに思索するには良いかも知れないが、我々には刺激が少なすぎて少々張合いのないところです。その様な環境に沈んでしまった連中を、学生寮の寮生は、八王子ボケにかかったとも言います。そしてたまには町に出ないと使いものにならなくなってしまうぞなどと言いあって蟄居の身をなぐさめあっているのです。

緑の田園風景が広がる中でポッカリとえぐり取られた様に土をむきだしにしている殺風景なキャンバス、建築学科があるというのに全く貧弱な建物、ただ太陽だけが一杯あふれている八王子校舎。そこに学ぶ、建築学科を始めとして各科の学生、合せて二千数百名。一見のんびりと日々を過している様だが、各々皆、何かしなければといった意気込みで色々と準備をしているように見える。だが新宿に行っても一向にそれがパッとしてしないのは一体何故だろうか?。都会の喧騒にスポイルされてしまったのだろうかそれとも八王子ボケが頭に回ってしまったのだろうか。

いずれにしても、今の工学院大学の新宿校舎は(新宿校舎で)八王子校舎の事など知らん顔で勝手な方向に行くし、八王子校舎の方もスタンバイだけはかけたものの、未だに動き出す気配がない。



## 第6回卒クラス会の報告

清水一義・高岡敏夫（建築38年卒）

38年3月（第6回）卒の、クラス会を、1月18日、オリンピック新宿支店で開催しました。今度のクラス会は卒業以来、約6年ぶりで開くもので、みんなで大いに期待していたのですが、残念な事に、出席予定者33人、教師4人計37人でしたが、実際出席した人は、わづかに19人、先生は波多江健郎先生、山下司先生だけでした。しかし、6年ぶりの再会を喜び、工学院大学建築学科を卒業し6年の社会生活を送った者が、建築について語り、又学生生活を振りかえり、昨今の学園問題を語り、楽しい有意義な一日を過せたと思います。そして又、再会を約し解散したのです。今回は出席者21人でしたが、これにこりず、毎年1回はかならずクラス会を開き、横に手をとり合って、益々、活躍していこうと思います。

## 同期会便り

34年卒業（1部建築2回）同期会、2月1日（土）湯島会館 幹事・浅見欣司・宮沢孟、小高鎮夫 今年は学校を卒業して10年に当るので、卒業後毎年開いていた同期会も四年前から中止していた関係もあって、今回は盛会なものにしようと云う幹事同志の話合いの元に準備は進められた。当日先生6名、卒業生24名、の出席者を得、楽しい一ときを過ごした。そのあと同期生会員、信濃町南国酒家にて二次会をもち、夜の更ける迄お互の現況を話し合う。最後に次期幹事を宮島隆則、野浦淳、石井学、三名と決定し散会した。

先生の出席者氏名、堀越三郎夫妻・下元連・波多江健郎・大庭常良・天野太郎・樋口清

ぼくは山へ登ってゆこう

貧しい小屋のあるところへ

自由に胸がうちひろがり

自由の風が吹くところへ

ぼくは山へ登ってゆこう

樅の木がそびえるところへ

小川が流れ鳥がさえずり

大きな雲がわくところへ

——ハイネ（「ハルツの旅」より）

## 趣味

### 私とヨット

金田昭治（建築33年卒）

私はヨットが大好きだ。初めてヨットに乗ってから10年になるがその魅力に取りつかれ、休みになれば海へ行ってヨットに乗っています。ヨットの醍醐味、豪快さに私はすっかり魂を奪われてしまいました。

私は小さい時から海が好きでいつも海に憧れています。小学生の頃から毎年夏には臨海学校に行き真黒に日焼して泳いでいました。私の育った所は新潟県新発田市ですので海は日本海です。『海は荒海向は佐渡よ』の北原白秋の歌にも有るように、小さい時泳いだ海も佐渡ヶ島の見える海でした。水泳が好きで遠泳などはいつもトップを切って泳ぎました。

私がヨットを初めて見たのは工学院大学に入學して夏休みに逗子の海へ泳ぎに行った時です。広い海に大きな蝶のような白い帆を上げスイスイ走っている姿は夢の世界を見ているような気持でした。その時の夢はいつか自分でヨットを持ち自由に海の上をスイスイ走って見たいと思っていました。

大学を卒業してから海の好な友達と何んとかヨットを持ちたいと相談していたら19フィートの1年乗った中古が売りに出ていたので金を出し合って買いました。

私がヨットに取りつかれたのはそれからです。乗れば乗るほど面白く技術の奥を深めたり、又楽しみもふえてきます。

同窓会報の創刊号に『ヨットへの誘い』を書いたところ、多数の会員の方より一諸にヨットに乗りたいとデンワがかかり、去年と今年の夏の7・8月の休日は会員の皆さんにヨットを解放し湘南の海を毎週楽しく乗り廻っ

た。同窓会の諸氏が集って最っとも良い点はゼネレーションの違う人達が建築と云う素晴らしい共通点を持ち、お互に夢を語り、仕事のことなど話し合うことが出来る、ヨットは、タイミングが非常に大切でヨットに乗っている人間の心が一つにならなければなりません。自然皆の心が通じ合い、新しい友達がふえて行きます。自分の世界が広くなり知識も豊富になります。

広い海をヨットで走らせていれば紫外線を体いっぱいにあび、健康的であるし、心身共にヨットは最高だと思います。同窓会の皆さんヨットに乗りたければ、(376)2711へお電話下さい。江の島でまた会いましょう。

### ヨット激情

ヨットは私の命だ、海を見よ  
波、それはいつも激しくぶつかり合っている

一時も落付くことのない荒てん坊だ  
海の波を見ていると私の心は激しくゆさぶられる

私はヨットに乗り無中で波の中へ突き進んで行く

波は激しくヨットにぶつかって砕ける  
私は頭からビショ濡れでスリルを感じる  
風よ吹け、もっと吹け、海の上のマラソンだ  
走る、走る、水面を一人で走る自然の力だ神秘的だ  
帆は胸いっぱいに風を吸い込み思いのままに走る  
私の胸も夢と希望にふくらみ生甲斐を感じる  
いまわしい現実や過去などさらりと忘れてしまう

未来への無限のファイトが湧いてくる  
或る日ビキニの美女と一緒に乗り恋を語り楽しかった  
或る日マストより高い波で転覆しもう終りかと思った  
或る日風が無くなり晩中ブカブカ波に浮いていた  
いつかヨットで月へ行ってみたいと思っている。

ヨットには無限の夢があるだから私はヨットが好きだ

（日本都市建築設計事務所）



## 1968年の主なできごと

1月

- 15日 米原子力空母エンタープライズの佐世保寄港に反対し、佐世保に向おうとした反代々木系全学連の学生131人が東京・飯田橋で凶器準備集合罪の適用をうけて逮捕。また19日までに学生たちは博多駅や九大、佐世保市で警官と衝突。東京では外務省に乱入した学生89人が逮捕された。

2月

- 16日 東京では17年ぶり、九州、四国では37年ぶりの大雪で、死者・不明21人。  
21日 宮崎県西諸県郡えびの町を中心に強い地震があり、宮崎、鹿児島両県などに大被害（-24日）

3月

- 25日 国鉄定期運賃の値上げが申請通り認可され、  
4月 1日から平均37.8%の大幅値上げとなった。  
31日 ジョンソン米大統領は「北爆を一方的に停止する」と発表、北ベトナムに和平交渉を呼びかけ、次期大統領選には出馬しないと言明。

5月

- 16日 北海道、東北地方を襲った十勝沖地震で、死者45人、行方不明5人、家屋の全半壊1320戸を出した。

6月

- 2日 米第5空軍所属のジェット戦闘機F4Cファンтомが、九大に建設中の大型計算センターに墜落。  
5日 米大統領選の民主党候補ロバート・ケネディ上院議員が、ヨルダンからの移民青年サーハン・B・サーハンに撃たれ、6日未明死去した。  
11日 東京・神田の日本大学で、20億円の使途不明金問題と学園民主化をめぐり、全学共闘会議と体育会系の学生が衝突、100人を越すけが人が出た  
17日 東大の医学部紛争で安田講堂を占拠の学生らを排除するため、大河内総長の要請で機動隊1200人が同大学にはいった。

7月

- 7日 第8回参議院通常選挙の結果、当選者は自民69、社会28、公明13、民社7、共産4、無所属5となり、タレント候補は全員当選して。

8月

- 8日 札幌医大付属病院で、和田寿郎教授らにより日本初の心臓移植手術が行われた。提供者は水死

した大学生、もらったのは、18歳の宮崎信夫君  
同君は手術後83日目の10月29日死亡した。

- 18日 岐阜県白川町の飛弾川に愛知県岡崎観光のバス2台が豪雨による土砂くずれで転落、乗客107人のうち104人が死んだ。

- 20日 ソ連・東欧5カ国の軍隊が事前通告なしに、チエコスロバキアに侵入、プラハなど全土を占領

10月

- 12日～27日第19回メキシコ・オリンピック大会開かれ。日本は重量あげで2連勝の三宅義信をふくめ、金メダル11個を獲得、米、ソに次いで3位となった。体操男子は団体総合、個人総合のほか、種目別でも6種目中4種目を制勝、陸上のマラソンでは君原健二が銀メダル、サッカーも初のメダル（銅）を獲得した。

- 17日 1968年度ノーベル文学賞受賞者に「雪国」千羽鶴などの作家、川端康成氏が選ばれた。和服姿の川端氏は、国王グスタフ6世から今年度のノーベル文学賞を受けた（12月10日）

- 21日～22日国際反戦デーモで新宿駅を占拠放火した騒ぎに対し、学生デモとして初めて騒乱罪が適用され、310人を逮捕。

11月

- 2日 有馬温泉（兵庫県）の旅館「池之坊満月城」の火事で、30人死亡、48人が負傷。  
6日 ニクソン、ハンフリー、ウォレス3氏で争われた米大統領選（5日）はニクソン氏が両氏を抑え、37代大統領に選ばれた。  
10日 沖縄の主席・立法院選挙がおこなわれ、公選主席に野党統一候補の屋良朝苗氏が沖縄自民党の西銘順治氏を破って当選。  
27日 自民党第21回臨時党大会で佐藤首相は第1回投票票で過半数を獲得、三木武夫、前尾繁三郎氏を破って総裁に3選。

12月

- 10日 東京・府中で、午前9時半ごろ、日本信託銀行国分寺支店の現金輸送車が、白バイの警官を装った男に襲われ車ごと2億9,400万円が奪われた。  
21日 人類初の月周回をめざして米宇宙船アポロ8号が米ケープケネディ宇宙センターから打上げられた。乗組んだのはボーマン船長ら3宇宙飛行士。10回目の月周回をし、28日（日本時間）太平洋に着水。

## 昭和44年の建築界の動き

### 43年の建築界の動きとして

1. 十勝沖地震による函館大学校舎を始めとする多くの鉄筋コンクリート造公共建築物の被害
2. 三菱旧一号館の解体と対照的な東京中央電信局の取り壊し
3. マンションブームと稲村建設の倒産
4. 都市公害の発生と富山県神通川流域に発生したイタイイタイ病を企業が起した公害と国が断定したこと

5月16日に青森県東方沖に発生した十勝沖地震は全壊676戸半壊2994戸にのぼったが特に注目することは学校、市庁舎、消防署、国鉄駅等公共建築の被害が大きかったこと、特に函館大学のごときはRC4階建校舎4000m<sup>2</sup>の1階部分の柱が全部圧壊陥没と云う普通では考えられない被害を受けた。これはRC造と云うものがもっている耐震耐火造と云う概念を吹き飛ばすに充分だった。

前後するが3月25日三菱旧1号館は「抜打ち的に解体」(朝日)を始めた。42年にはライト設計の帝国ホテルが壊され今又コンドル設計の1号館が壊された。又前後して東京中央電信局が壊されることになったが、これについて6月13日の朝日新聞(標的)は「これを取りこわすにあたって電々公社は自発的に建物に関する記録を作り後世の人達に残そうとしている。なぜならこの資料は未来の人たちが新しく創造する場合に激励するのに役立ち、社会教育的効果があるばかりでなくそこにみられる作品と設計者に対する尊敬の念の中にはこれからもすぐれた建物をつくりだすことによって、万人に奉仕しよう」と記している。

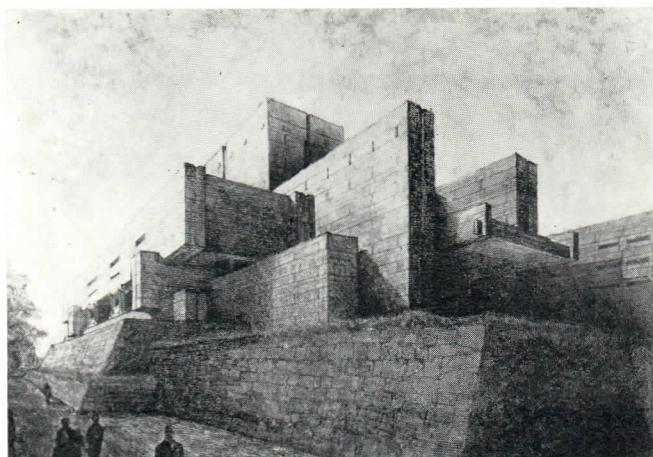
とする誇りの心がみられるからである。郵政省と電々公社の前身である通信者は的確なデザインポリシーをもって幾多のすぐれた建物を生みだしてきたが、その精神と伝統が今なお失われていないを喜びたい。それに比べるとわが国の事務所建築の第1号である赤レンガの建物の破壊の過程はあまりにもお粗末である。だからこそ丸ノ内街はビジネス建築の指導的地位からはおりてしまったのだろうと述べ資本の社会的自覚を促していた。

最近都内のマンションブームは1日に1棟出来るとも云われる程だが、その蔭にあって中小建設会社の倒産が合次ぎ、特に稲村建設の場合は社長が国会議員と云う地位を利用して出資者を信用させ経営が行きづまり倒産して社長は雲隠れと云う消費者不在の資本と人民不在の政治が結びついた例がある。

神通川流域のイタイイタイ病の発生は建設と特に関係は無いかも知れないが最近の様に公害が多く発生する場合その原因はウヤムヤにさせることが多い中で、はっきりと企業を名ざして断定した意義は大きい。

昨年も皇居の宮殿を始めとするばかりか金をかけた建築が多かった。それも特に大資本と中央政治権力に結ばついた建築が多かったが建築の本質を見誤ったものがある。

都市は増え巨大化し公害の発生が多くなる中で、建設省として又市民として、実践に理論をあたえいかに行動すべきかについては羽仁五郎著都市の論理が示針を示している。これが今年の最高の収穫であろう。そこでは独立資本と政治権力の結びつき、それが市民生活と自治体の活動をいかに搾取しているかが明解に述べられている。これは資本と政治権力に対する告発状である。



## お知らせのページ

### 編集室よりのお願い

“同窓会誌は一応目を通すよ” “又次号を頼むぜ” こんな会誌にしよう。皆様の原稿をお願い致します。

次号 45年3月予定

会誌名称 会誌には名称がありません。親しみのある名称をお願い致します。採用の時は薄謝を呈します。

原稿募集 会員の皆様から次の要領で原稿を募集します。

テーマ 特に定めません。御意見・研究・紀行・記録・随筆・詩歌・俳句等、建設的なものただし未発表作品に限る。

枚 数 400字詰原稿用紙8枚以内  
送 先 工学院大学学園同窓会事務室(新館8階)  
注 意 原稿には必ず卒業年度、コース、氏名、住所、勤務先を明記のこと

### 同窓生の皆様へ会費納入についてのお願い

いよいよ寒さも加わり、皆様お元気でお過しのことと思います。私達の建築学科同窓会が発足して早や3ヶ年、ここに会誌第2号を発刊し、お手元に配布出来ましてやっと型だけは整いました。今迄は学校、並に校友会の援助があって運営して参りましたが、一昨年四月から私達の会費によって活動致しております。又一昨年11月に発足した学園同窓会の費用もこれに加わり、年間約100万円程の予算が必要です。この現状を知って頂きまして、同窓生諸氏の絶大なる御協力をお願い致します。

なお支払の方法は同封の払込用紙にてお願い致します。

入会金 500円 同窓生全員に払って頂きます  
会費1年 500円 最低一ヶ年分以上  
終身会費 5,000円 終身会員を希望される方  
会員名簿 500円 直接同窓会事務室(8階)へこられる方は400円

#### 例

終身会費名簿共(入会金+終身会費+会員名簿  
 $= 500 + 5,000 + 500 = 6,000$ )

終身会費(入会金+終身会費=500+5,000=5,500)  
会費担当分科会 浅見 欣司

### 同窓生の皆様正しい住所勤務先をお知らせ下さい

同窓会の大切な仕事は名簿の完備にあり、しかも卒業生、在校生の誰れでもが、必要な時に見て利用出来なければなりません。そのためにはあなたの正しい住所と勤務先が必要なのです。同封したハガキの、所定の欄に必要な事項を書き込んで至急同窓会事務室へ郵送して下さい。その後の変更は学園同窓会事務室へハガキか電話で御連絡下さい。これによって、総会のお知らせと同窓会誌は確実にあなたのお手元に届きます。

現在、次回名簿の資料作成を開始しております。  
郵送には、卒業年度と専攻を明記して下さい。

名簿分科会 木村 幸弘

### 広告募集

卒業生の皆様、実社会にて御活躍の事と思います。会誌発行は多額の費用を要します。皆様の勤先、依頼出来る会社の広告をお願い致します。詳細は編集部迄

次号からアルバイト斡旋欄をもうけます。

求人希望の方は編集室迄御一報下さい。  
求職希望の方は編集室迄御一報下さい。

### 編集部

なお同窓会についての詳しいお問合せは各卒業年度の運営委員にお願い致します。運営委員名簿は巻末を御利用下さい。

建築学科同窓会、学園同窓会事務室内  
東京都新宿区角筈2の24 (342) 1211 内線 287

### お知らせ

同窓会総会は毎年学園祭の中の日曜日か祭日に行います。在学生の活動及び作品を御覧下さい。当日は親睦会も開きます。ふるって参加出席して下さい。

総会実行分科会  
運営委員会

建築学科同窓会会誌に御意見・御感想があれば、  
お聞かせ下さい!

## 運営委員会記事

### 第12回運営委員会

43年3月8日

本校8階第3会議室にて議長は小高会長により行われた。

決定事項は次の通り

1. 会誌創刊号は43年3月22日発行予定

(建築35年卒 宮崎勝弘)

2. 卒業者名簿は新卒者名簿を別冊に製本し既製名簿と添えて3月22日に新卒者には無料で配付する。

(建築39年卒 木村幸弘)

3. 卒業式当日の運営委員会の活動について  
式終了後新卒者を一堂に集めて同窓会のPRを行う

出席者 15名

### 第13回運営委員会

43年4月3日

1. 新卒業生に対する同窓会入会の説明会について  
(廻築34年卒 小高鎮夫・会長)
2. 会誌創刊号の反省及発送について、発送は各卒業年度毎に運営委員が準備する。
3. 名簿について、会員カードを整理しておく、既製名簿が配付完了したので、第二刊発行の準備をする。
4. 同期会(クラス会)援助の件、通信費を一人当たり、30円を援助し会員相互の親睦をはかる。

出席者 17名

### 第14回運営委員会

43年5月9日

1. 特別会員の解釈(名誉、特別、賛助会員)  
①名誉会員一會に貢献された方、運営委員会が推せんし総会の承認を得る(例・会長3期以上、学長等)  
②特別会員一建築学科現旧教員(内規として講師以上)  
③賛助会員一(個人および団体)  
1口 5,000円の会費を納めた方、ただし5年間有効とする。

④短期大学卒業者は正会員にする。

⑤校友会関係は次のような2本建て関係者と話し合う、工手学校(建築土木)卒の人は賛助会員になってもらう

2. 親睦会について、総会後特別会員を招いて巾広く懇親会をもつ。

3. 1部建築7回卒今野興治氏を運営委員として承認

出席者 12名

### 第15回運営委員会

43年6月12日

1. 同窓会誌第2号発刊について

今度会誌にテーマを設け、教授、学生、同窓生の共通

の話し合いの場をつくる。

### 2. 運営委員会強化について

事業、人、組織の強化を計る。事業は特に会員にとって魅力あるものとする。運営委員会に出席できない人は出席出来る人と交替する。

### 3. 学生会員に対する援助の件

学内コンペに援助したい。

出席者 10名

### 第16回運営委員会

43年7月9日

1. 学生コンペに対する援助について学生委員佐渡氏より年度予定および既に実施した第1回コンペについて説明あり討議の結果下記の条件つきで援助決定  
○審査、賞金のきめ方等運用は前回に準ずる。  
○前回の優秀作品を会誌へのせる。

### 2. 会誌第2号発刊について

先生に原稿を依頼する、学生会員に協力を要望する、会誌発行に対する報酬について、編集に時間と労力を要するので、アルバイトその他経費を出す。

出席者 12名

### 第17回運営委員会

43年9月11日

第3回定期総会開催について

1. 期日、場所、43年11月3日午後1時、工学院大学新宿校舎第1、第2会議室

### 2. 開催通告

経過報告、会計報告(42年10月1日~43年9月30日)役員改選について、懇親会開催について、同封するもの住所変更届、会費振替用紙

### 3. 昭和44年度(3年度)予算案

#### 収入の部

・前 年 度 繰 越 金	4,341,018.—
・会 費 等 収 入	2,700,000.—
学生会員入会金会費	2,500,000.—
卒業生会員入会金会費	200,000.—

計 7,041,018.—

#### 支 出 の 部

同 窓 会 会 誌 発 刊 費	400,000.—
各 部 会 充 実 費	20,000.—
厚 生 部 経 費	50,000.—
名 簿 発 刊 費	100,000.—
本 部 経 費	50,000.—
準 会 員 援 助 金	50,000.—
予 備 費	50,000.—
総 会 費	100,000.—
学 園 同 窓 会 分 担 金	230,000.—
次 年 度 繰 越 金	5,991,018.—

計

7,041,018.—

7,041,018.—

## 総会記事

第3回定期総会（建築学科同窓会）

日時 昭和43年11月3日 午後1時

会場 工学院大学第1, 第2会議室

出席者 43名（委任状255名）

- |                       |   |
|-----------------------|---|
| 1. 開会の辞               | 浅見  |
| 2. 会長の挨拶              | 小高  |
| 3. 議長選出               | 議長 黒岩<br>書記 中村  |
| 4. 二年度事業報告            | 金田  |
| 運営委員会報告質疑なし           | 承認  |
| 5. 二年度会計報告            | 宮沢  |
| 6. 二年度会計監査報告          | 宮島  |
| 二年度会計報告内容検討の結果別状なし 承認 |   |
| 7. 三年度事業計画案報告         | 金田 承認   |
| 8. 三年度予算案             | 宮沢 承認   |
| 9. 役員選出               | 会長 小高鎮夫 34年建築卒<br>副会長 黒岩弘一 40年設備卒<br>〃 金田昭治 33年建築卒                |
| 10. 閉会の辞              | 浅見  |
| 運営委員会のありかたについて質疑応答    |   |
| 質問                    | 事業計画の具体案はないか。   |
| 答                     | 同窓会山の家、海の家、ヨット等計画しております。ヨットは金田氏所有のヨットを解放してもらい既に20人位利用している。        |
| 質問                    | 現状の運営委員組織を変える必要はないか。  |
| 答                     | 運営委員会は各クラスより代表を2名出しているが、会合への出席者は4位である。全員職業を持って忙しい立場にあるので全員出席は無理だ。 |
| 質問                    | 同窓会の役員の出席者に報酬があつても良いのではないか。                                       |
| 答                     | 各運営委員は同窓会を立派にしたい義務感でやっているが食事代、電話代、ハガキ、交通費位は支払ってやるべきだと思う。          |
| 質問                    | 校友会と同窓会との連絡はどうなっているのか。  |
| 答                     | 現在では結論は出でていないが、校友会と同窓会は一体化したいので現在努力中である。                          |
| 質問                    | 校友会費を支払った者は同窓会費を支払わなくてよいのか。                                       |
| 答                     | 校友会と話がついていないので同窓会費は支払って欲しい、話がついたら二重支払い者には返済する。                    |

金田昭治記

## 2年度会計報告

自昭和42年10月1日

至昭和43年9月30日

歳入の部		
1)前 年 度 繰 越 金	2,664,966.	—
2)会 費 等 収 入	2,697,355.	—
学生会員入会金、会費	2,507,760.	—
卒業生会員入会金、会費	186,595.	—
3)名 簿 代 金	2,800.	—
4)親 和 会 出 席 者 会 費	3,900.	—
5)会 報 広 告 代	26,819.	—
6)利 息 収 入	25,448.	—
合 計	5,421,288.	—
歳出の部		
1)事 務 費	48,335.	—
チェックライター他	27,640.	—
封筒印刷	8,000.	—
追 加	3,500.	—
送 料	9,195.	—
2)同 窓 会 会 誌 発 行	445,600.	—
会 員 名 簿 追 加 印 刷	54,000.	—
準 会 員 名 簿 印 刷	6,500.	—
カ ー ド と じ 込 み	5,850.	—
カ ー ド 印 刷	21,000.	—
挨 拶 状	5,000.	—
会 誌 印 刷	263,200.	—
送 料	90,000.	—
3)学 園 同 窓 会	411,827.	—
設 立 準 備 委 員 会	50,000.	—
42 年 度 分 担 金	130,182.	—
43 年 度 分 担 金	209,245.	—
学 園 同 窓 会 会 報	22,400.	—
4)準会員に対する補助金	50,000.	—
2 部 すみよし会	17,000.	—
1 部 設備工学会	16,000.	—
1 部 学友会	17,000.	—
5)第 2 回 総 会 経 費	124,508.	—
6)次 年 度 繰 越 金	4,341,018.	—
合 計	5,421,288.	—

以 上

監査 宮島 隆則

## 工学院大学建築学科同窓会則

### 前 文

私達建築学科同窓生は、伝統ある母校を愛し、交友を維持発展させる為、互に親睦を図り、相互扶助の精神を尊び広く建築の諸問題を研究する事を目的とし、健全な人間関係の確立と意志伝達の機関として、ここに規約を定めて、工学院大学建築学科同窓会を結成する。

### 第1章 総 則

- 第1条 本会は工学院大学建築学科同窓会という。
- 第2条 本会は本部を工学院大学建築学科事務室とし、また必要に応じて支部を各地に置く事がある。
- 第3条 会則の改変は総会の承認を得なければならぬ。

### 第2章 事 業

- 第4条 本会は前文の目的を達する為に次の事業を行う。
  1. 会員相互の連絡
    - 1) 会報および会員名簿の刊行
  2. 会員相互の親睦
    - 1) 会員相互の親睦会開催
    - 2) 海の家、山の家、開催
  3. 会員に対しての援助
    - 1) 正会員、学生会員に対しての育英資金の貸与
    - 2) 災害に対する資金カンパ
    - 3) 学内コンペに対する助成
  4. 講演会、研究会、開催
  5. 他団体との交流
    - 1) 校友会、他学科同窓会、他校同窓会
  6. 本会の目的を達する為にその他必要と認めた事業

### 第3章 会 員

- 第5条 会員は正会員、学生会員、特別会員とする。
- 第6条 正会員は工学院大学建築学科（建築コース・設備コース）、建築学専攻科及び大学院建築学専攻の卒業生とする。
- 第7条 学生会員は工学院大学建築学科（建築コース・設備コース）、建築学専攻科および大学院建築学専攻（本学卒業生を除く）に在学する学生とする。
- 第8条 特別会員は本会目的に賛同し、運営委員会の認めた個人および団体とする。

### 第4章 役 員

- 第9条 本会に次の役員を置く。

会 長	1 名
-----	-----

副 会 長	2 名
会 計	1 名
会計監査	2 名

運営委員（正会員・学生会員より）若干名

第10条 役員は次の方法で選出する。

- 1) 会長は総会での直接選挙で選出する。但し当分の間、運営委員会で選出し総会の承認を得る。
- 2) 副会長・会計は運営委員より運営委員会の同意を得て、会長が任命する。
- 3) 運営委員は正会員より卒業年度別に選出する。
- 4) 会計監査は正会員より運営委員会で選出し総会の承認を得る。
- 5) 学生運営委員は本会が認めた団体から各2名を運営委員とする。
- 6) 本会の必要に応じて相談役を置く事が出来る。
- 7) 相談役は運営委員会にはかって会長が推選し、会長の諮問に応じて各種の会議に出席し意見を述べ事が出来る。
- 8) 本会役員は無報酬とする。

第11条 役員の任期は2カ年とし、学生役員は1カ年とする。但し再任は妨げない。

- 第12条 1) 会長は本会を代表して会務を総理する。
- 2) 副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はその職務を代行する。
- 3) 会長は運営委員会の長を兼務する。
- 4) 運営委員会は会長が招集し、毎月1回開催する。また、運営委員の1/3以上での要求のあった時は招集しなければならない。
- 5) 運営委員会は、会長、副会長、会計、運営委員で構成する。
- 6) 運営委員会は予算および企画、重要事項を審議する。
- 7) 運営委員会は各分科会を設けて、本会に定められた事業を行う。

### 第5章 総 会

- 第13条 総会は本会最高の議決機関で正会員で構成し議長は正会員の中から選出する。
- 第14条 総会役員は議決に加わらない。
- 第15条 学生会員及特別会員は議決に加わらない。但し傍聴は拒まない。
- 第16条 総会は通常総会、臨時総会とする。  
通常総会は毎年10月に之を開く。
- 第17条 臨時総会は次の場合会長が招集する。
  - 1) 運営委員会が必要と認めた時

- 2) 100人以上の正会員からの会議の目的事項を示し、その開催を請求した時

第18条 総会の目的、期日及場所は会期2週間前に之を全正会員に通知しなければならない。

第19条 総会の議題は予め通知した事以外に亘る事は出来ない。

第20条 会員の議案は提出者側で総会に出席して説明する事を原則とする。

第21条 会員が出議案を提出の場合は4週間前に運営委員会に提出しなければならない。

第22条 次の事項は通常総会において承認を受けなければならない。

1) 前年度事業報告

2) 前年度収支決算

3) 本年度事業計画

4) 本年度収支予算

第23条 総会の決議は出席正会員の過半数の同意を必要とする。

第24条 総会の決議で賛否同数の場合は議長採決とする。

第25条 正会員は書面を以って総会における議決権を総会に委任する事が出来る。

## 第6章 会計

第26条 正会員、学生会員は入会金として金500円を納付する。会費は次の三種とする。

正会員 1カ年 500円

学生会員 1カ年 300円

終身会員 前納 5,000円

但し正会員および学生会員で会計年度の中間に入会したものは月割計算とする。

第27条 会計は、通常会計および特別会計に分ける。

1) 通常会計は会費およびその他の収支とする。

2) 特別会計は入会金並びに基本金としての指定寄付金とする。但し基本金の利子は通常会計に編成することが出来る。

第28条 特別会計は総会の決議を経ずして使用する事は出来ない。

第29条 基本金保管方法は次の何れかにしなければならない。

1) 国庫債券

2) 郵便貯金

3) 銀行預金

第30条 会計年度は10月1日に始まり翌年9月30日に終

る。

第31条 毎年度予算および決算は会報により報告する。

## 第7章 支部

第32条 支部を設置しようとする時は支部会則を定めて運営し、本部に運営委員を送る事が出る。

## 第8章 事務局

第33条 本会運営の円滑を期す為に事務局を置く。

1) 事務局長は運営委員より選出する。

2) 事務局は局長1名事務員若干名で構成する。

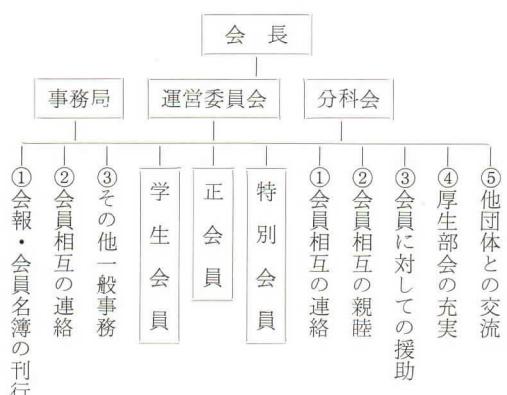
3) 本会事業を行うため事務一般を掌る。

4) 事務局長は運営委員会にそのつど本会事業一般を報告する。

5) 必要に応じて事務局細則を定め運営委員会の承認を得る。

## 第9章 付則

第34条 本会則は昭和42年1月22日より発効する。



学園同窓会関係記事は、学園同窓会発行の会報に掲載されます。

# 工学院大学学園同窓会則

## 第1章 総 則

- 第1条 本会は工学院大学学園同窓会と称する。
- 第2条 本会の事務所は学校法人工学院大学内に置く。
- 第3条 本会は工学院大学学園内同窓会の連合であつて相互の連絡と親睦を図り、相互理解を深めかつ工学院大学学園の発展に寄与しようとするものである。

## 第2章 会 員

- 第4条 本会は次の団体会員からなる。

1. 工学院大学専修学校同窓会
2. " 高等学校同窓会
3. " 機械工学同窓会
4. " 応化会
5. " 電気同窓会
6. " 建築学科同窓会

### 第3章 役員・代議員および名誉会員・相談役

- 第5条 役員 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長 1名、副会長 2名、理事 40名以内（会長 1名、副会長 2名、常任理事 7名、（副会長を含む）以内を含む）、監査 2名。
- (2) 代議員 代議員は各団体会員の推薦によるものとし、次のように構成される。
  1. 工学院大学専修学校同窓会 15名以内
  2. " 高等学校同窓会 "
  3. " 機械工学同窓会 "
  4. " 応化会 "
  5. " 電気同窓会 "
  6. " 建築学科同窓会 "
- (3) 名誉会員 名誉会員は本会に特に功労のあったもので、理事会で推薦し代議員会で承認されたもの。
- (4) 相談役 相談役は本会に特別の関係があるもので理事会で推薦し、代議員会で承認されたもの。  
相談役は会長の諮問に応じ、重要事項について、会に意見を述べることができる。

### 第6条 役員および代議員の責務は次の通りとする。

- (1) 会長は本会を代表し、会務を統理する。
- (2) 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代理する。
- (3) 常任理事は本会の運営の方針を立案し、会務を分担して処理する。

- (4) 理事は本会の運営方針を定め、これを実行に移す。

- (5) 代議員は予算、決算その他の重要な事項に関する会務に参与する。
- (6) 監査は会計を監査し、代議員会においてその結果を報告する。

### 第7条 役員の選出は次の通りとする。

- (1) 会長は理事の互選により定める。
- (2) 副会長は会長が委嘱する。
- (3) 常任理事は理事のうち各団体会員から 1名づつ選出されるものとする。
- (4) 理事は代議員中から互選するものとし、これに学校法人工学院大学理事長の推薦による関係各学校の教員 5名を加える。
- (5) 監査は代議員会において、代議員の中から選出する。

### 第8条 本会の役員の任期は 2 カ年とし、重任は妨げない。

## 第4章 理事会および代議員会

### 第9条 常任理事会および理事会は必要に応じてこれを開き、事業遂行について協議し、会務を処理する。議長は会長がつとめる。

### 第10条 代議員会は最高の議決機関であり、毎年 1 回以上開き、予算、決算、会則の変更など重要な事項を審議決定する。代議員会は委任状を含む定数の 2 分の 1 によって成立し、その議決には出席代議員の過半数の同意を必要とする。議長は、その代議員会において選出される。

### 第11条 理事会および代議員会は会長がこれを招集する。また、代議員の 3 分の 2 の要求があるときは会長は代議員会を開かなければならぬ。

## 第5章 支 部

### 第12条 便宜の各地区に支部を設けることができる。

## 第6章 会 計

### 第13条 本会の会計年度は 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終る。

### 第14条 本会の経費は団体会員からの会費、その他によって、支弁する。

### 第15条 団体会員の会費は次の通りとする。 (略)

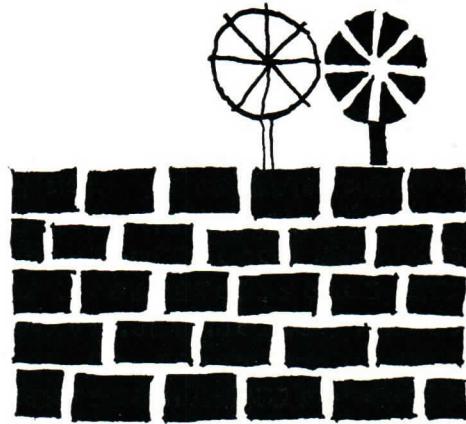
### 第16条 本会の予算および決算は毎年これを代議員会に報告して承認を求めるなければならない。

## 付 則

- (1) 本会則は昭和 42 年 11 月 12 日から実施する。

## 同窓会組織

- 1) 会長 小高鎮夫  
2) 副会長 黒岩引一 金田昭治  
3) 会計 小儀一男  
4) 会計監査 宮島隆則  
5) 事務局 倉持道夫  
6) 企画部 高岡敏夫 清水一義 丸山英明  
7) 名簿作成部 木村幸弘  
8) 会費徵収部 浅見欣司 田辺定治  
9) 会誌発行部 本田 小高 金田 戸田 黒岩 宮崎  
10) 総会開催部 雨宮健次郎 桃井直照  
11) 厚生部 代表 囲碁部 久保 保  
釣 木村幸弘  
ヨット 金田昭治  
コーラス 渡部  
山の家 高沢  
ハイキング 川島



## 編集

## 後記

創刊号の時は宮崎氏本田氏小高氏等ベテランが先頭に立って完成した。

第2号は創刊号の諸氏共仕事の都合でたづさわれず、経験少ない私がトップでやったので心細かった。

創刊号より立派なものを出したいと思っていたのですが原稿がなかなか集まらず編集〆切がどんどん延びた、おかげで総会前ぎりぎりの10月発刊になってしまった。

今回は正直云って少数の人間で発刊させることで精いっぱいでいた、約1カ月終電で帰る日が続き日中もあちこち飛び歩き大変でした。

会員の皆さん第3号のために原稿を寄せて下さい。同窓会報は皆さんの会誌です。立派なものにするのも皆さんの協力が必要です。

同窓会にもっと関心を持って戴き、互に親睦を計り仕事をプラスするよう努力しましょう。

早くから原稿を寄せて下さいました方には会報発刊が遅れて申し訳ありませんでした。

なお、原稿を寄せて下さいました皆様には、この欄を借り、御礼申し上げます。

—K生—

同窓会誌の発行もようやく2回目、編集員の悩みはいつも同じと思う。限られた時間内での活動、写真やカットづくり、原稿不足の補充等々……

今回もご多分にもれず、原稿不足で創刊号より少なくみじめな思いで、後記を書くことになった。

「へたな職人は道具に文句をつける」のたとえのごとく編集工夫の不足により、創刊号の形式と同様にならざるをえなかった事、編集員一同反省しています。

編集の楽しみと云えば、寄稿された原稿を始めて読むこと、それらの選定と組み入れにあると思う。

第3号では、大いに原稿が集まり創意のあふれた機関誌ができる事を祈っています。

—始めるのはたやすい、それを持続させるのは一つの技術である—機関誌発行に際して思う。

—T生—

編集委員 金田昭治  
〃 戸田庸二  
編集発行 工学院大学建築学科同窓会  
印刷所 株式会社富士工芸

# 学校法人弘報 第112号(臨時) 工学院大学

9月26日、学長より「学生諸君」と題して下記の通り告示されました。

## 学生諸君に

9月18日(木)夕方から19日(金)早朝にかけて、全学闘争委員会といふ名のもとに集まつた約50名の本学学生が八王子校舎1号館を占拠封鎖した。

それより前9月13日(土)午後、全学闘争委員会準備会といふ名称による大衆団交の要求書が大学に提出された。大学は休日であったが15日(月)関係の委員会を開いて検討した結果、次のような意見の一致をみた。「大学は從来、どのような立場の学生であろうと、本学の学生である限り、意見を交わし、討論し、よりよい大学を築こうという方針をもってきている。また、現在学生諸君の間にいろいろの疑問や要望もあることであるから前期試験終了後適当な時期に全学的集会を開いて、諸問題に対する大学の意見を述べ、学生諸君と忌憚のない意見の交換を行いたいと考える。しかし現在要求されている大衆団交が一方的な糾弾を目的とするものであるならば、相互の討論は不可能であるから、それには応ずべきではない。その点をまず確かめるべきである。」

そこで、16日(火)大学側は前記全学闘争委員会準備会の代表4人と会い、大学は上記のような全学的集会を開き、充分討論する用意があるが、要求されている大衆団交がそのような討論の場でありうるか否かを訊ねたところ、やはり一方的な糾弾の場となる可能性が強いことを確認せざるを得ず、従ってそのような意味での大衆団交には応じられない旨を伝えた。

同16日の午後、右準備会は今度は全学闘争委員会なる名のもとに再度18日(木)に大衆団交を開くよう要求書を提出した。大学は17日(水)教授総会を開き、やはり建設的でない上記のような大衆団交には応ずべきでない。また、要求書に示されている内容は、全学生に關係するものであるから、大学としては前期試験終了後、全学的集会を開いて卒直に意見を交換する機会をもつとい

う態度を定めた。

そこで、18日その旨を全学闘争委員会の代表3名に伝えたところ、同夕の6時頃より突如約50名の学生が1号館の封鎖を始めたのである。

このような行為のよって来る原因は、現在の社会情勢およびその中の大学の在り方に深く関係している。しかし、全教職員および大多数の学生の意志に反するこのよな校舎の占拠破壊封鎖は許容すべからざる行為である。続々集まってきた多くの学生はこの不当な行為に対し実力で封鎖の解除につとめた。この間次第に集合し、来つた教職員も、学生の身体に危険の及ぼざることを第一の目的としながら封鎖の解除に努力した。

この間、もっとも遺憾であったことは、封鎖に加わった学生たちが、その学友である本学学生および教職員に對し、火焰瓶、石などを投下したことである。学生の間には残念ながら負傷者も出た。このような行為は断じて許すことはできない。

翌19日未明、封鎖した学生は、多くの学生、全教職員の努力により、自ら占拠封鎖を止め、多くの教職員、学生の見ている前で、以後暴力をふるわず封鎖などを行なわないことを認めて解放された。

### 学生諸君

現在、大学は多くの問題を抱えている。その諸問題に關し大学は諸君と共に考え、よりよい大学の姿を築くべく努力している。校舎の占拠破壊封鎖の如き行為は、その努力を中断させるものでこそあれ、決して前進的な手段ではない。

大学は封鎖した学生たちの、再びこのような行為をなさないとの言葉を信ずると共に今後いかなる集団による校舎の占拠破壊封鎖も許さない決意を以て事に當るつもりである。

### 学生諸君

我々はこのような事態の生じた所以を深く考え、全力を擧げてよりよき研究と教育の場を築くべく努力したい。

学生諸君の協力を期待する。

昭和44年9月26日

工学院大学学長 野口尚一

今日に於いては、最早や、日常の茶飯事と化した学生騒動は、本学に於いても例外ではなく、上記の告示の如き事態になり、学内の教授会、教授総会、などと連日あらゆる会に於いて学園紛争の議題でうづまっている。

同窓の諸氏も御心配の事と存じますが、本学の場合、特に原因が学園内にあるとすれば、同窓会として、だまっている訳けには行かない。同窓生諸氏よ、この事態をいかに考えるか御意見を寄せられたい。

(編集部)

# 工学院大学学園同窓会報

No. 2

1969. 1. 31 発行 〒160-91  
東京都新宿区角筈2-2-4  
工学院大学学園同窓会  
電話東京(342) 1211 内線 287



化学館もできますます充実する八王子校舎群

## 新年を迎えて

工学院大学学園同窓会会長 山根 茂 (応化会会長)

輝かしい新春を迎え、各同窓会員の皆様の御健康と御多幸をお祝い申しあげます。

学園同窓会も各同窓会の御協力のもとに、又皆様の御支援によって、いよいよ、その基礎が充実しつつありますことは、誠に御同慶に存じます。

さて、本会創立以来約一ヶ年をふりかえってみると、創立後尚日があさく、いろいろ御批判もあるうかと存じますが、今後一層努力して、逐次改善してまいる所存ですので、よろしく御協力を御願申しあげます。ただ時折耳にすることの中で、私らが甚だ心外に思うことは、本会と校友会との関係が、いまだに、御理解願えずにはいる方々が少なくないことがあります。このことについては、既に各同窓会を通じて、又本会会報創刊号などによって、十分御理解願えたものと存じておりましたが、御多忙なために、各同窓会が催す会合に御出席できなかつた方や、あるいは又会報をよく読んで頂けなかつた方もあることと思われますので、やや重複のきらいはありますが、この際、改めて、この点について申述べたいと存じます。

そもそも、この学園同窓会が、どういう経緯で設立されたかということは、要約すると次の理由からであります。第一に、大学各科にそれぞれ同窓会が設立され又高等学校および専修学校もそれぞれ同窓会をもつようにな

ったこと。第二に、これらの同窓会が活発な活躍をしていくための経費として、校友会が収納した会費のうちの一部を割当てられたのでは、所期の目的を達することができないので、直接各同窓会が会費を収納するようになったこと。これらが、いわば本会が設立される動機となったものであります。即ち、各同窓会相互の連絡を密にし且つ親睦を深める目的から、連絡機関として設立されたようなものであります。従って、これに要する経費は、各同窓会が応分に分担しているものであります、この点が従前校友会がとられていた方針と著しく異っているところであります。

こういうわけで、一部の人達の間で、いわれているような『校友会に反抗して、校友会を分裂させた』わけではなく、むしろ、当初からの念願は、校友会がとりあえず、会名等そのままでも、この学園同窓会に加盟して頂くことがありました。しかし校友会の御都合から、まだそれが実現されずにあるのが現状であります。もちろん、校友会の会員が、主として、工手学校並に工学院出身者のみとなった現在、先細りが考えられますが、これについては、本会に加盟されたのちに、十分協議して善処すればよいことだと思います。速かに当初の念願が実現しますよう、改めて切望する次第であります。

## 第1回代議員会・懇親会の状況

昭和42年11月12日に設立総会を開き、新しく第一歩を踏み出した学園同窓会は、その後順調な歩みをつづけ第1回代議員会は丁度半年後の新緑の侯に行われた。場所は霧雨気を変えるため学校を離れお茶の水の駄に近い下記の場所で開かれた。相憎の疊り空であったが御多忙中にも拘らず御出席下された学校側選出理事の諸先生を初め多数の代議員の方が参集され、熱心に学園同窓会の発展のため意をつくされ議事は極めて円滑に進められ、新年度の前進を期待しつつ予定時間に終了した。

### 第1回代議員会

○日 時 昭和43年5月12日 11時より12時まで

○場 所 私立学校教職員共済組合湯島会館

○出席人員 34名（その他委任状18名）

会次第（敬称略）

1. 開会の辞および司会 織野善夫（電）
2. 議長団選出 議長 八木平八郎（機）
  - 副議長 栗山栄三郎（高） 山本清（専）
  - 書記 小林偉男（応） 斎藤静昭（電）
3. 会長挨拶 山根 茂（応）
4. 準備委員会決算報告 長坂舜二（機）
  - 前号会報記載を承認
5. 昭和42年度事業報告 山根 茂（応）
  - 大要是次の通り①学園同窓会事務室が工学院大学新館8階に開設された。②第1号会報を発行した。
6. 昭和42年度決算報告 根岸照雄（電）

## —会務の報告—

### 第4回常任理事会（4月29日）

#### 議案

1. 代議員会開催について

### 第5回常任理事会（9月26日）

#### 議案

1. 法人寄付行為改訂委員選出について
2. 法人評議員の選出について
3. 会報の発行について
4. 報告事項

1. 電気同窓会会長交替について
2. 大学工業化学草野研究室の災害御見舞
3. 大学自動車部全日本ラリー出場
4. 菊地元理事長の弔問

別記を承認

#### 7. 昭和42年監査報告

榎本忠良（高） 南雲芳夫（専） 両監査より相異なることを報告

#### 8. 昭和43年度運営方針 松本克巳（応）

同窓会会報を出来るだけ年2回発行にしたい。

#### 9. 昭和43年度予算案の提出 遠藤鎮雄（高）

別記を承認

#### 10. 閉会の辞 織野善夫（電）

### 懇親会

代議員会終了後、同会館に於て招待者を含め78名の多数の参会者で催され。

司 会 横尾 実（専）

開会の辞 小浪 博（専）

会長挨拶 山根 茂（応）

祝 辞 野口尚一理事長

乾 杯 伊藤英亮校友会相談役

の順で行われ、乾杯が終ると和かなパーティ風景となり、テーブルスピーチもあり、今までの労苦を語り合い、先輩後輩の交流がそこそこで交され、更に学園同窓会の前進と未来を語り合っているうちに早や閉会の時が迫り

閉会の辞 遠藤 鎮雄（高）

があり、名残りを惜しみつつ散会した。（松本記）

## 副会長 長坂舜二

### 第6回常任理事会（11月6日）

#### 議案

1. 法人寄付行為改訂案について

### 第3回理事会（4月18日）

#### 議題

1. 42年度決算報告

2. 43年度予算案

3. 会報発行について

4. 代議員会開催について

### 第4回理事会（10月1日）

#### 議題

1. 法人寄付行為改訂委員の選出

2. 会報第2号発行について

その他報告事項

## 昭和42年度学園同窓会決算

自昭和42年11月12日 至昭和43年3月31日

## 収入の部

(分担金)	
機械工業同窓会	136,168
応化会	78,935
電気同窓会	134,965
建築学科同窓会	130,182
高等学校同窓会	19,563
専修学校同窓会	55,047
設立準備委員会からの繰越金	16,642
計	571,502

## 支出の部

人件費(職員1名分)	198,803
本俸	177,500
家族手当	5,000
超勤費	4,469
期末手当	11,834
小計	198,803
事務費	38,273
消耗品費	10,243
通信費	2,380
印刷費	25,650
小計	38,273
交通費	7,900
理事事務員	400
小計	7,900
会議費	18,460
理事会	9,520
会報編集委員会	3,920
その他	5,020
小計	18,460
備品費	216,990
長椅子	25,500
肘掛け椅子	43,500
応接卓子	8,000
机	24,660
椅子	5,200
流し台	20,500
ガス台	10,300

食器戸棚	8,750
間仕切工事	38,750
応接卓子(追加分)	5,100
椅子子"	14,500
椅子カバー	3,330
その他の	8,900
小計	216,990
雑費	30,383
雑費	30,383
小計	30,383
予備費	10,000
校友会新年懇親会祝金	10,000
小計	10,000
43年度繰越金	50,693
総計	530,809

## 昭和43年度予算

自昭和43年4月1日 至昭和44年3月31日

## 収入の部

(分担金)	
機械工学同窓会	225,285
応化会	150,793
電気同窓会	232,642
建築学科同窓会	209,245
高等学校同窓会	77,685
専修学校同窓会	111,597
前年度繰越金	50,693
計	1,057,940

## 支出の部

人件費(職員1名分)	664,050
本俸	426,000
家族手当	12,000
超勤費	10,000
期末手当	116,050
予備	100,000
小計	664,050
事務費	35,940
消耗品費	6,000
通信費	9,940
理事会	5回×35名×22円=3,850
総会	1回×95名×22円=2,090
その他	4,000
計	9,940

印 刷 費	20,000	会 報 発 行 費 (本部用)	3,600
小 計	35,940	会 報 費	6 円×600部= 3,600
交 通 費	29,850	小 計	3,600
理 事 事	1,370円×5回= 6,850	備 品 費	50,000
事 務 員	1,500円×12回=18,000	リ コ ピ 一	15,000
そ の 他	5,000	机	5,000
小 計	29,850	他	3,000
会 議 費	124,500	小 計	50,000
理 事 会	5回×35名×500円= 87,500	雜 費	50,000
常 任 理 事 会	10回×7名×100円= 7,000	予 備 費	105,000
諸 委 員 会 費	10,000	総 計	1,057,940
総	会10名(招待者)×2,000円= 20,000		
小 計	124,500		

## 新春新想

学校法人工学院大学理事長 野口尚一

新年というと何となくあらたまつた感じを持ち、過ぎた年を顧み、来るべき年の心構えをするのが通例のようであるから、筆者もこの機会に、も一度本学園同窓会のそもそもその出発から考えてみたいのである。新しい学校制度が施行され、それに依ってできた学園の各学校も年と共に成長し、各学校の卒業生は数においても質においても社会的にそれぞれの立場で重きをなすような地歩を築き始めた。言い換えれば、同じ道を進む最も親近感のある者たちが自分たちの団体を結成し、特色ある独自の目標に向って緊密な団結の下に会員相互の切磋支持によって各自の進歩を図ができる段階に達したと考え得るようになった。この意義によって各同窓会が相ついで結成され所期の目標に向って前進し始めたわけである。これらの幾つかの同窓会は同じ建学精神に基づき同じような方針で育てられた卒業生の団体であるから、学校により、専門によりそれなりに特色を持ちながらも、当然一脉相通するものがあり、学園全体に関する事柄、或は共通的な事柄については各自異った解釈をする筈はなく幸に一致した方向性を取るものと考えられる。全学園的、共通的な立場で各同窓会の態度を決定し、その実行に必要な企画を進めるためには、総合的な一つの執行機関が是非とも無くてはならない。これが学園同窓会の存在理由であり、渾然とした一体の中に特色ある個々の存在を確立して行くのに最も有効な組織であると思う。

各同窓会が多少異った性格であり、その出発が区々であったこともある、統一された指向性に達するには幾分の時間と苦心を要したに相違ないが、現在ではその存在の意義と、るべき姿とが認識されて、本来の目的とする連合体組織になりつつある。これからは進んで連合体としての任務を達成し、それによって各単位同窓会の業績を一層向上させて行くことが始まる。即ち本当の活動に入る時機に達したということである。

も一つ問題として残されているのは校友会との関係であると思うが、現在のところ早急な解決は期待できないようである。しかしこれは両者の性格が異うとか、対立しているとかいう理由ではないから、いずれは時が解決して呉れるものであると思う。つまり同じ一つの学園に対し同じような気持を持ってはいるが、現在は成り行きの上から併立して行かざるを得ないという考え方である。もちろん両組織の会員に別々な気持があるとは思われないから、特に地方においては別々に支部を持つなどとは考えずに、両組織の地方支部であるような気持をもって共々に手を携えて活躍することが最も望ましい現在の姿勢であると思う。このことは筆者の日頃の念願であって、先日行われた校友会の会合でも同じ趣旨で御願した次第である。

## 同窓会の目的

理事 松下芳男

校友会でもいい、同窓会でもいい、卒業生の団体の目的は、親睦を図ることにある。それ以下でもなければ、それ以上でもない。その親睦を土台として、各卒業生は、それぞれの関係を結んで、各自の幸福利益をはかるべきである。学問的協力、技術的提携、事業的連繋、政治的同行、求人求職の便宜、趣味的同好、その他いろいろあるが、こういう利益は、親睦の土台上に立つ。しかしこういろいろなことは、各人各人の意思と希望と目的によるべきものであって、それを校友同窓会自体の目的とすべきものではない。校友同窓会の根本目的は、親睦であって、それ以外のものは、この親睦の上に立つ同志、同行、同業者の利用（少し表現が下品だが）になるのである。

わが工学院大学校友会が、終戦後の馬上の混乱時から立ち上って、戦前の校友会を復活したのは、約二十年前である。四散していた校友の住所を確かめ、本部の形態を整えるとともに所在に支部を設けたが、一面工学院大学の発展に連れて、会員数は、年々に増加した。それは明治維新後、明治政府が近代国家の形態を、だいに完備したようなものであって、中央集権制度は、必然でもあり、また必要でもあった。校友会は強力な中央集権制であって、それは当然の組織であった。

ところが学園の発展、校友の大増加とともに、中央集権制にヒビが入ってきた。厖大な団体となつたために、各人特に青年層の会員意識は、ともすれば乏しくなり、従つて中央政府での本部の役員は浮き上つた。青壯年パーティーは、老壯年パーティーとなり、総会は、一部会員の議論場となり、支部の加入者は、案外延びないという現実となつた。

そこで私共学校当局者、つまり校友の供給者たる私共は、校友同窓会本来の根本目的たる親睦を強化するために、校友の地方自治制たる各科別自治制を図つたわけである。日本国憲法の中央集権を緩めて、地方分権を図つたようなもので、これまた必然にして、必要な歴史的推移だと思っている。従つて社団法人たる校友会を、一応解散することである。もしくは棚上げすることである。

こうした主張を、私共は、一昨年から昨年にかけて、約一カ年間、校友会の内部において説いた。私はその急先鋒の一人であったかもしれない。これに対して、校友会の幹部諸君は、双手をあげて賛成されるものとばかり信じて少しも疑わなかつた。何となれば、校友会の現状が、だいに中央集権的の權威を失い、独立的校友の団体が生まれかかっていたからである。このままでは徳川幕末の形相になるばかりであったからである。

しかし残念なるかな、この企図が、校友会の一部の有力な幹部諸君の意に合わず、校友会は分裂して、同窓

会の新組織となつてしまつた。この事態は、全く心外なことであつて、私共の衷心の痛恨事であった。これはなぜか、私は二つの理由を考える。

その一是「社団法人」の幻影である。曰く「校友会は國家に認められた団体である。それをやめるのは惜しい」と。しかし親睦団体が、國家に認められようと、認められまいと、どうでもいいではないか。曰く「社団法人だと税金が安い」と。しかし校見会は、親睦団体で、営利団体ではないから、税金など問題ではない。曰く、「國家の監督下にあるから、役員の不正が起ららず、会員は安心して、会費を出す」と。この意見には、反論する勇気がない。校友会侮辱のははだしいものである。曰く、「他の大学もそうだから、本学もこうする」と。自主性のない附加雷同的の意見として卑しむ。曰く「社団法人の方がいかめしい」と。ハイ、ハイ、さようですか、というだけである。

もう一つは、大先輩校友諸君の老婆心である。「われわれが指導しているからこそ、校友会が道を誤らずに進む、われわれが去ったならば、各同窓会はどうなるかわからない」と。まことに学院愛に燃える立派なご意見である。しかしこれには大きい誤解がある。新組織の同窓会が、大先輩を排斥しているように思われることは、男が子を生むような大誤解で、私共は大先輩には、強い親近感と尊敬とを抱いているのである。

つまり各同窓会は、自治制をとつて分権化しているけれども、その上に中央政府のような連合会組織があり、これには中央政府的権能はないけれども、同窓会を代表しているものであつて、私共はこの中央政府に、大先輩を迎へようと思ったのである。否、今でも思つてゐるのである。

校友会と同窓会の一本化、私はこれを希求すること切である。方法としては、校友会がそのまま同窓会の傘下に入ることである。「社団法人が、同窓会の傘下とはなにごとか」といわれることは、社団法人たる幻影に囚われるもので、いつでも条件さえ揃えば、法人になりうること、魚屋、八百屋の株式会社の如じであつて、大したものではない。また校友会はそのままにして眠らせ、各人はどこかの同窓会に加入されることである。また「工手学校同窓会」という元老的同窓会を作つて、同窓会に加入されることである。「工手学校、名がいやだ」という人があるらしいが、これも私共には意外な話で、工業日本の有力な担い手を出した名譽ある工手学校は、誇りでこそあれ、卑下する必要は、毛頭もあるまいと思うのに、ああ、それなのにそれなのに。私にはその考え方が理解しない。

以上が私共の希望し、期待する同窓会である。校友会の大先輩諸君、一本化しようではありませんか。

## 各学校の近況

### 大 学

#### 1. 学科編成と学生数

本学も開業以来20年を経て、当初の機械および工業化学の2学科、学生数250名から出発して、いまや6学科8コース、専攻科および博士課程をもつ大学院を含む別表のような充実した内容をもつ工業单科の大学にまで発展して来た。学生数も大学の1部5,334名2部3,376名、専攻科57名、大学院49名、計8813名、専任の教職員は430名に達している。

工学院大学学科編成と学生人員数（1968-12月1日）

	学科およびコース	1部	2部
大 学 工 学 部	機械工学科	996	617
	生産機械工学科(2部はコース)	477	276
	工業工学科	615	331
	化学科	459	98
	電気工学科	764	473
	電工子学科(2部はコース)	732	488
	建築工学科	805	717
	設備工学科	486	376
計		5,334	3,376
専 攻 科	機械工学専攻	—	17
	工業化学専攻	—	10
	電気工学専攻	—	21
	建築工学専攻	—	9
	計	—	57
大 学 工 学 院 研 究 科	機械工学専攻	修土課程	博士課程
		15	1
	工業化学専攻	5	1
	電気工学専攻	12	3
	建築工学専攻	11	1
計		43	6

#### 2. 43年度の各科主任教授と大学主務役職名

43年度の標記編成は次の通りである。

学長：野口尚一、共通課程：平川紀一教授、機械工学科：山内邦比古教授、生産機械工学科：加藤蓄二教授、工業化学科：横山正明教授、化学工学ユース：浜井專藏教授、電気工学科：升田五一教授、電子工学科：秋山守雄教授、建築学科：波多江健郎教授、設備工学ユース：吉田辰夫教授、大学幹事：山口章三郎教授、教務部長：河野憲一参事、厚生補導部長：森島恒雄教授、八王子校舎管理長：山下善太郎教授\* 図書館長：松尾靖秋教授

#### 3. 最近の主な新施設

現在新宿校舎約7,000坪、八王子校舎約6,500坪（学生寮1,500坪を含む）を大学用として用い、1部の1,2年を八王子校舎、3,4年、大学院と2部を新宿校舎で授業している。昭和43年から新設された主な施設として、NECの2200型の電子計算機（時価約12,000万円）が文部省補助金（4,500万円）を得て購入され、新宿校舎内に電子計算機センター（所長奥野治雄教授）が発足したことと、八王子校舎に約600坪の化学関係実験研究室が開かれたことが挙げられる。（幹事 山口章三郎）

### 高 校

昭和41年11月立派な新校舎が竣工され、翌年4月、八王子の地で生徒を募集しました。

入学者数は320名で本年も約同数という結果になりました。定員は各学年400名でありますから2年間を通算しますと200名分が空席となります。1割増の収容を考えると約5,000万円の収入減があります。経営上大変な痛手です。生徒の集まらなかった原因を考えてみると、第一、高校生の急減時代に遭遇したこと。第二、八王子駅からバスに乗るため時間と交通費のかさむこと。第三、近辺の中学校の先生方にも新宿時代のイメージがのこっていて、いわゆる難かしい学校ということで敬遠された形跡のあること。以上でつきるようですが、つまりPR不足です。そこで本年はこのPRに全力をあげることにして努力をつづけております。つぎに当高校のすぐれた点を列挙してみますから御協力の程おねがいします。

1. 大学の付属であること。しかも一人息子的存在で、めざす大学は工学部だけのすぐれた大学であること。普通科の大部分の生徒は高校で行われる推せん試験をうけて入学ができます。工業科の生徒は就職するのが

本筋ですが進学を希望するものは普通科と同じく推せん試験を受けることができます。毎年相当数入学しています。元来工学院魂と申しますか、働きながら学ぼうとする根性のある青年は大学二部に進学すべきだと思います。

**2. 環境のよいこと。**まず環境は八王子近辺では第一かと思われます。体育館、運動場も整備されきれいな空気の中でスポーツを通して身体を鍛えうことができます。

**3. 施設、設備のよいこと。**テレビ放送、視聴覚教室、図書室、体育館の施設にいたってはどこにも負けません。実習室は本年度中に大体整備したいと思っています。PRのはど重ねておねがいいたします。

(校長 鈴木 実)

### 専修

この1年の工学院大学専修学校は、全く充実と躍進の年であった。

その第1は、部分的にではあるが、卒業生に対する色々の資格が公認されたことである。すなわち、電気科卒業生は卒業後実務経験2年で第3種主任技術者免状を、実務経験5年で第2種主任技術者免状を無試験で与えられるという特典を政府から公認された。これは国立の高等専門学校の電気科卒業生に与えられる資格と全く同一のものであり、本校は名実共に高専に匹敵する学校であることを国家から公認されたに外ならない。又建築科は

卒業後2年の実務経験で2級建築士の受験資格が東京都から認められた。これも今までの実務経験5年に比べればこれ又大躍進である。造船科の小型船舶主任技術者資格に就ても同様に考えてよい。

これらの成果を挙げ得られた原因に就ては、学校当局の非常な努力の結果によるることは勿論であるが、出身者諸君の実社会に於いての地道な活動が一般に認められて来たという背景がものを言った事は言うまでも無い。心から同窓生諸君に感謝の意を表する次第である。

校内の教室も、新しい机を入れたり、間じきりをして教室数を増したり、漸次整備され10年前の卒業生から見れば、隔世の感があることと思われる。在校生の大部分は高校時代の優等生で占められ、大学卒業者で本校に学ぶ数も全員の10%を越し、授業内容も一段と充実向上し、その格調の高さも一般の大学や短大に決してひけをとらないと断言できる位になって来た。

春の運動会、夏の修学旅行、秋の製図展覧会も、益々盛大に催され、学生一同連日連夜の猛学習にあえぎながらも楽しく朗らかに有意義な学生生活を送っている。

ゲバ帽とヘルメットで全く無意味に大切な学習時代を浪費している学生が周囲をとりまいている中で、よく働きよく学ぶわが工学院大学専修学校出身者の将来は誠に洋洋たるものであると信じている。これが自己の使命を自覚して真に学ぶものの崇高な姿である。

(校長 小浪 博)

## 各同窓会の近況

### 大学機械

会長 長坂 犀二

機械工学同窓会では本年度に理事会5回、評議員会1回を開き予算、決算および本年度の事業計画などについて審議を重ねた。事業計画の主なものは次の通りである。

1. 同窓会誌の発行：会誌の発行がおくれているが、漸く準備が出来つつあるので、2月下旬に第3号が発行

### 大学電気

会長 富沢 達男

私は今春山下前会長に代って電気同窓会の会長という大任を仰せつかりました。

どうやら卒業年度が古い（第2回ですが事実上は第1回に当る）というのがその理由のようですが学窓を築立てる以来の9年間校友会並びに学校関係行事には殆んど失礼して唯会社業務に専念して参りましたので重責が果

される予定であり、今年度からは確実に毎年発行ということで準備を進めている。

2. 名簿の発行：現在第3回の同窓会名簿を5月下旬に発行の予定で原稿の作成を進めて居り、住所不明あるいは住所不確実な会員のないようにと色々苦心をして居ります。若し、先頃お送りした名簿資料カード（総会出席通知）を御届け頂いてない方は、是非至急御送付下さい。

せるか、いささか心細い次第です。

学園同窓会の発足した経緯や今後の運営等について留任された理事の方を中心にして、これまで数回理事会等を開いて打合せ協議して参りましたが、その主なものとしては各理事の職務分担を決め従来のように特定な理事だけに負担のかからないよう改善したこと担当理事による名簿の整理、会報発行準備および学校行事に関する学生への援助等が挙げられます。それ以外は特にお知らせできる活動はしておりません。当面の活動方針としましては

学園同窓会電気同窓会の設立主旨を会報等を通じてまずPRするとともに有名無実の同窓会にならないような体制作りが急務と考えます。

山下前会長のお言葉に『母校は心のふるさとであり母校の発展は同窓生の双肩にかかる』とあります。

すように私学に於ける同窓会のもつ意義はばかり知れないうものがあります。私どもも選任されました以上責任を痛感し微力ながら本会の発展に努力する覚悟であります。会員各位の積極的な御支援御協力を切にお願い申し上げ新任の御挨拶と兼ねさせていただきます。

### 大学建築

### 会長 小高 鎮夫

昨年12月、新役員による運営委員会が発足した。本学科同窓会は卒業年度別に選出された運営委員によって絶えず新しい年代の意見を反映する機会が作られている。

今年度は、年度別組織強化促進の部会、学生、同窓生教授を結ぶ連絡協議会の発足、厚生部としてはヨット部の開設等、会員相互の親睦を深める計画である。更に既に活動を開始している会誌発行、名簿発利、学生コンペ援助等の活動、又今後必要と思われる同好会的部会、海の家、山の家等の厚生活動の基本を作成、各担当責任者と充分協議し、それらを総合的、かつ能率的に運営する

ため、企画部を設けた。そしてこの企画部は、今後の建築学科同窓会の有機的かつ、フレキシブルな体質作りの要めとしてその活躍を期待されている。

又、校友会との関係については建築学科同窓会としても何らかの形で前向きな態度で進みたいと考えている。それは現在、先輩による、唯一の又強力な、更に同窓生をも一部含めた組織であるだけに、学園同窓会を通して、互に利益を守りながら、慎重に、根気よく話合うつもりである。そしてその支部は、私達同窓生にとっても重要な組織であると思うので、支部問題を中心に検討し共通点を見出す努力を重ねる必要があると思う。いづれにしても母校発展のため地道な歩を進めたい。

### 大学応化

### 総務委員

わが応化会は、1954年1月31日、再興して以来、はや15ヶ年を経過し、幾多の変遷はあったけれども安定した地歩を続けて今日に至っている。これは、山根会長始め先輩諸兄姉の協力と情熱の賜物であり、また、一方会費を終身会費として学生会員中に積立徴収していた先見の明が、今日の健全な発展を約束していたと思う。学園同窓会中のいづれの同窓会よりも歴史的に古い伝統を自負している応化会は、それだけに、つぎの明日への歩みについて、指導標を打ち樹てる責任を感じている。

ともあれ、学園同窓会の組織中の一員たる応化会事務

局として、ここに提案がある。

それは、現時点では、確固たる経済的な基盤があるので、各同窓会が、統一的な見解の下に、会員カードを作成し、容易に検索できるシステムを採用し、要すればカード検索機(IBM用330MP137万円)を購入して事務能力を向上し、やがてコンピューターの高度利用化を期待したいと考えている。そのハシリとして応化会では'68年版新名簿発刊に際し、会員に、コードNo.を付し、小単位でもコンピューターが使用できる態勢を整えている。この点に関し、各同窓会幹部識者の批判と、さらに、一步前進し、協力的に受け入れ態勢を整えていただくことを切望致す次第である。

### 専修学校

### 会長 小浪 博

創立以来満4年、終始変わぬ会員諸氏の御理解と御支援を頂いて、本会は順調に成長を続けている。本会の最大行事である総会が、回を重ねる毎に盛大になる事実が、何よりも雄弁に之を証明している。去る6月に行われた第6回総会には、実に332名が出席、地下講堂は専修学校魂を宣揚する熱気と和氣で、はちきれんばかりであった。

又資金面での充実も著しい。発足当初は事務費は勿論通信費まで、母校から援助を受けていたが、今年度予算では、会誌および名簿出版費、母校電気2科種認定祝賀会への祝金等を計上し、更に若干を基金として定期預金できるまでに前進してきた。

運営面でも次々と改善されている。従来の事務局を中心とした運営を、今後は幹事長を軸とする専門委員会で運営する方針を決め、その手初めとして名簿委員会が発足、新名簿の発行も間近い。

会員諸氏の御尽力に対し、厚く御礼を申し上げる。

善ばしいことだと思います。

われわれの母校の工学院大学高等学校は、いよいよ本年3月で、まったく新宿を引きはらしまいますが、一抹の淋しさを感じます。

新しい酒は、新しい袋にもらなければなりませんが、同窓会は、新宿も八王子もなく、一つのまとまりとして進んでいかなければなりません。われわれ幹部の責任は更に重きを加えたような気がします。諸学兄のご支援を願うゆえんです。

### 高等学校

### 会長 中山 栄司

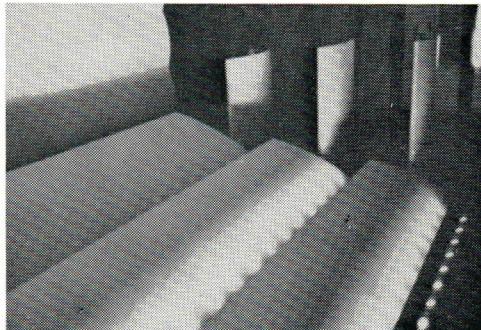
高校同窓会は、発足後まだ2年にも満たず、よちよち歩きの段階です。とにかく、組織の確立、経済基盤の樹立に追われております。従って行事らしい行事もおこなえませんが、飛ばず、鳴かずの苦しい時期はたえねばならないと思います。

連合組織も順調に発展しているように、見受けられ、

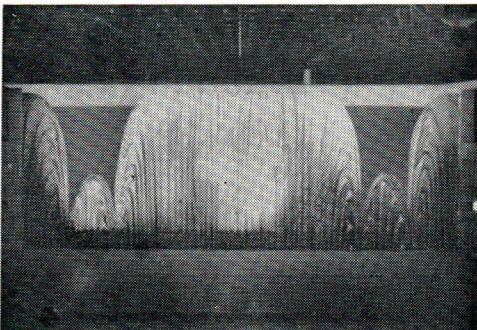
# 舞台設備

Regular

## 設計・製作・施工



8型絞り綾帳間口23M(2間)  
高さ8.5M(4.7間)  
電動昇降装置1.5KW 3 2.2KW 2台  
(宮城県民会館)



音響反射板電動昇降装置(宮城県民会館)  
天井前面巾23M 奥巾9M 側面高8M  
正面反射板高さ5M 巾9M

弊社は劇場、公会堂、体育館、講堂、映画館の  
舞台設備、各種娛樂機械設備のメーカーとして  
御愛顧と御高評をいただいております。

### ◎主要工事納入先

- ◇東京歌舞伎座、日比谷公会堂、国立劇場、NHKスタジオ。
- ◇県立、宮城、山形、秋田、福島、静岡、県民会館。
- ◇市立、郡山、会津、高松、高槻、川越、高岡、萩、岸和田、福島、米沢市民会館。
- ◇体育館、駒沢オリンピック体育館、秋田、山形、宮城スポーツ体育館
- ◇区立、杉並、品川、豊島、北区、千代田、板橋区民公会堂を始め慶應、立教、日大、大妻、共立大学その他民間ホール、観光、商社の施設等を行っております。
- ◇アフターサービスと保守サービスは良心的な弊社の画期的服务にご期待下さい。

### 営業品目

- 舞台 吊 物 装 置
- 音響反射板 製作 一式
- 廻し舞台・廻り上・廻り出し装置
- マイクロホン可動電動装置
- 映写スクリーン装置 一式
- 舞台照明装飾 大道具 一式
- 電動式照明器具昇降装置
- 電動式鉄扉開閉装置
- 場内自動電動調光器
- 各種娛樂機械装置

日本劇場技術協会々員・全国ホール協会讃助会員

# 富士工業株式會社

取締役社長 大沢耀史 愛川高朗(建築40年卒)

本社・工場 東京都板橋区若木1丁目26番13号 電話 東京(931)1501代表

# 日栄建設 ▼ E ▼ 営業品目

工場・倉庫 ガレージ

厚生施設 ゴルフ練習場

アパート 各種展示施設

宿舎・店舗 内・外装工事

(軽量・鋼管・重量鉄骨構造建築一式) 設計施工  
(木造・鉄筋コンクリート構造建築一式)

株式会社 日栄建設

取締役社長 小川栄太郎

専務取締役 相田潤 (建築35年卒)

本社 東京都千代田区神田和泉町1番地

永幸ビル (861) 0772 (代)

工場 千葉県習志野市実駒町2-695

## 株式会社 日本都市建築設計事務所

東京都渋谷区幡ヶ谷1丁目3番1号 東和建材ビル3階

昭和45年1月より 東京都渋谷区幡ヶ谷1-5-6 平和ビル内

電話 (376) 2711-5965番

代表取締役 金田昭治  
一級建築士

(建築33年卒業)

### 営業品目

美術印刷企画制作

カタログ・ポスター

商業写真・報道写真

カラーライブラリー

ギフト用品販売

株式会社 富士工芸

東京都千代田区神田神保町1丁目26番12号

T E L (294) 5011-5

建築設計及び監理

株式会社 宮崎建築設計事務所

〒162 東京都新宿区北町18番地  
電話(260)3653・0803

宮崎 勝 弘(建築35年卒)  
宮崎 玲 子(建築37年卒)  
斎木 芳 夫(建築35年卒)

建築設計監理

株式会社

新建築設計事務所

東京都知事登録7968号

東京都武蔵野市境2丁目18-9

TEL 0422-51-2266

取締役社長 倉 内 成 彬

(建築34年卒)

